

Fate/Grand Order vs ALL RIDER -幕間の物語-

ジュンチェ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

★仮面ライダーアマゾン・オメガ編完結

★仮面ライダーゲノム、夏の檀黎斗祭り完結

☆仮面ライダーブレイド編 更新停止中

☆仮面ライダービルド編 開始

この作品は『Fate／Grand Order vs ALL

RIDER』の番外編……要は仮面ライダーがサーヴァントで幕間の物語があつたらという話です。時系列は風都終了後ですが時系列はサーヴァントによって前後します。本編見てないという方も、取り敢えず仮面ライダーのサーヴァントがいたら？というおつまみ程度感覚で読んで頂ければ……（汗）

※Fate／シリーズ、仮面ライダーシリーズのネタバレを恐らく含みますのでご注意ください。

※息抜き程度の執筆なので更新は多分、他の小説より不定期です。

※仮面ライダーレーザー（幸運・E）

目次

【嘘イベント予告】FVA. 仮面ライダーサンタクローズ編〜星降る聖夜と銀龍と少女騎士〜	1
特別編 セミ様のバレンタインFVA版その後…	9
仮面ライダーアマゾン・オメガ編	
DELINEATION. I	30
DELINEATION. II	37
DELINEATION. III	44
profile：水澤悠II仮面ライダーアマゾン・オメガ（ニュー オメガ）	61
仮面ライダーゲンム編	
仮面ライダーゲンム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）	64
仮面ライダーゲンム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）〜女神の目に涙編。	72
AD MANS〜 前編	80
仮面ライダーゲンム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）〜地獄から来たDE AD MANS〜 後編	91
profile：新・壇黎斗II仮面ライダーゲンム	108
仮面ライダーブレイブ編	
命の責任・生きる意味 I	111
命の責任・生きる意味 II	122
仮面ライダービルド（桐生戦兔）編	
仮面ライダービルド Build on Build	129

B
u
i
l
d

o
n

b
u
i
l
d

II



【嘘イベント予告】FVA・仮面ライダーサンタク
ローズ編〜星降る聖夜と銀龍と少女騎士〜

「…さて、どうしたものか。」

……アルテラ・サン（タ）は困っていた。

そろそろ良い子が待つクリスマス。サンタの季節クリスマス。
……なのに、次のサンタは決まっていないのだ。

別に自分が2年連続でやってもいいが、大人の事情でそれは出来ない。
……が、次を任せて良い相手がなかなか見つからない。取り敢えず、今回は謎のシユメル熱とか謎の幼女スパムリイ等は発生していないので今回は黒への原点回帰（？）と子供が喜ぶものなら用意出来そうだと選ぼうとしたのは我等が神・仮面ライダーゲンム……だった
が

「貴様にサンタを譲るものかア!!モルガアン!!!」

「ぐわああああああああ?!?!」

【GAME OVER】

先代サンタと仲が悪かったのが運の尽き、ゲームオーバーしてしまつた。まあ、性格的に難があつたしかえって良かったかもしれない。
い。

……というわけで、食堂にやってきたものの食事時などとうに過ぎた深夜に例えサーヴァントとしてそう居ることはない。

「これは本当に2年連続で私が……む?」

望み潰えたかと思われたその時、食事の片隅にいたのは南米の女神

……

……………ではなく

「やっぱり、プロテイン醤油ラーメンは最高だぜ!!うんめエエ!」

「…」

食堂の主エミヤが見たらガチギレしそうな自前の夜食を漁るバカの姿があった。

「お前は…確か、仮面ライダーダーククローズ。万丈だったか…」

「お?アルテラじゃねえか! その格好…プレゼントでもくれるのか? というか寒くないの?」

万丈龍我…仮面ライダークローズ。(自称)天才物理科学者の桐生戦兎II仮面ライダービルドの相棒である上に希少なフォーリナーのサーヴァント。……なのだが、いかんせん頭があまり良くないとかバカなのである。それなりに強いがバカなのである。(大事なことなので二回言いました。)

「フォ、フォ、フォ! 私は確かにサンタだよ。だが、今年のサンタではない…故に今はプレゼントは出せないのだ。すまん、若いの。次のサンタにお願いをするのじゃ。」

「…? よくわかんねえけど、取り敢えずあれだな。プロテインくれよ。」

「お前話きいていたのか。」

ちよつと、セイバーの時にテンションが戻りかけたアルテラ。バカは文明ではなく生まれつきなので破壊出来ないが、流石のサンタさんでも呆れる。というか、プロテインをサンタにまでねだるとか頭おか

しいだろ。

「プロテインは良いぞ。大抵のことは全部解決してくれる……そのまま喰つてもうまいし、ごはんにふりかけてもうまい。機械の燃料にも建材にもなるし、良質な筋肉の育成だつてしてくれるんだぜ。最高だぜ本当。」

「凄いなプロテイン。そんな夢の物質、何処のダークサ●スが生産してるんだ？」

「万丈のプロテイン万能説はさておき、とにかく時間が惜しい。このままではクリスマスに間に合わない……」

ーピロン♪

「チャオ♪ 暇かアルテラ？ エボルトだ。」

「！（直接、脳内に!?）」

その時、本物の宇宙人からの通信が届く。うん、本来ならクリスマスどころかそれ以外でも関わったらいけない系のド外道宇宙人エボルト。その悪名は既にアルテラだつて把握している……そう、それは『本体』も然り。黒幕系サーヴァントは数いるがコイツが善意で行動することはまずないのは確かで今回はわざわざ何を企んでいるのか。『…（何の用だエボルト？ 私忙しい。貴様に構っている暇など……）』

「釣れないなあ相変わらず……ま、知ってるよ。だから、アドバイスしにきてやったんだよ。」

「…（助言?）」

「そうさ。お前、サンタを託す相手がいなくて困ってるんだろ？ このままだと、大事なクリスマスに間に合わないのは明白だ。」

「…（不要だ。誰が貴様の言葉なんぞ…）」

耳を傾ける必要は無い。聖夜に悪魔の囁きなどもつてのほか…だが、エボルトはお構い無しに続ける。

「お前が俺の助言を聞かないのは勝手だ。だがその場合、誰が今年のサンタクロースを務めることになると思う…？」

…万丈だ。」

「！」

「だが、奴にはサンタは出来ない。何故なら奴がサンタをやろうと思いついた時にはもうクリスマスは終わっているからな。お前の悩みに気がつかなかった奴は自分を責めるだろう…。それで良いのかアルテラ？ お前のつまらん意地で万丈だけじゃなく、子供たちの夢まで台無しにするのか!? それでも、お前はサンタなのか!?!」

「…!!」

多分、セイバーだったら『待て、その理屈はおかしい。』と考えられたんだろうが、サンタであることで思考がふわっとしてしまっていたアルテラ。勢いだけの言葉の衝撃が頭を駆け巡り、あわわ…とおのいてしまう。そこからは完璧にエボルトの流れだった。

「（おちたな。）…良いか、この事態を乗り切る手段はただひとつだ。サンタの力を今すぐ万丈に託せ。そうすれば、今年のクリスマスは無事に幕を開けられる。」

「…（し、しかし…）」

【仮面ライダーの霊基は変質を受けやすいが、その分だけ柔軟だ。特に万丈はその性質が強い。さあ…!!】

万丈をサンタにする…。確かに仮面ライダーが何故かサンタの能力を持っている奴がいたりした…エグゼイドとか。でも、先は謎のプロテイン論を展開したのを考えれば不安しかない。一方でバカも見方によっては純粹であり、黒歴史・トラウマで殴りかかる先輩サンタよりマシなのではと思ったり…

その頃、蚊帳の外の万丈はプロテイン醤油ラーメンを食べ終えて羊たちと戯れている。呑気なことだ。

(…：下手な奴に任せるよりマシか。)

妥協点というのも大事かもしれない。騎乗スキルあるからと言っておいそれとそこらのサーヴァントに任せれば聖夜どころか災厄を招きかねない。いつそ悪巧みなんて縁遠そうな存在こそかえって最適かもだ。

「クローズ!!」

「おおう!? どうした…?」

「私は決めたぞ…」

…：…今回のサンタはお前だ。」

そして、新たなサンタクロースの物語が幕を開ける。

【サンタクロース!!】

蒼銀に輝きを放つブリザードナツクルにサンタクロースフルボトルを装填する万丈。そして、ブリザードナツクルをビルドドライバーへ接続してハンドルを回せば、白銀のパーツが構成されていく。

【クロス・オン・クロースツ!!!】

【Are you ready?】

「変身!」

「聖 拳 咆 哮 ☆ サン タ ク ロ ー ス ! メ
リイイークリスマスツ!!! ドララララアア!!!! (若本ボイス)」

そして、氷柱が弾けるようなエフェクトで現れたのは白銀の仮面ライダークロース……否、それはただのクロースではない! 由緒ただしきブラックサンタやスパムリイ、羊と受け継がれてきたサンタを宿す龍! 背中のクリスマスっぽい緑と赤の二又マントがその証……その名も……!!

「仮面ライダーサンタクロース!! 俺のサンタが迸る……!! クリスマ

スでも負ける気がしねえ……ってダジャレじゃねえか!」

「フオ〜〜フオ!フオ!フオ!そこは気にするな若者よ。禿げるぞ。」

…取り敢えず、引き継ぎはうまくいったみたいだ。これで一安心だろう。エボルトのことは気になるが、様子を見てマスターと対処すれば良いだろう。

「では、これからサンタの流れについて説明していくぞ。ついてくるのじゃ、サンタクローズ…。」

「…」

「? …どうした?」

「いや、なんでもねえ。いくか。」

何やら思うところがある様子で自らの姿を眺めていたサンタクローズ…。特にアルテラは気にしなかった。同時に気がつかなかった…

…：サンタクローズ誕生の瞬間に謎の赤いスライムのようなものが分離していたことに

【嘘予告】

R
F a t e / G r o u n d
o r d e r
v s
A L L
R I D E

番外編

仮面ライダーサンタクローズ　　〵〵星降る聖夜と銀龍と少女騎
士〵〵

サンタクローズ「クリスマスも明日の地球も護ってやるぜ!!」

??? 「や…がて…：…星が降る…：星が降る…：…」

N E X T
???
…

特別編 セミ様のバレンタインFVA版その後…

「ふう……」

女帝セミラミス……愛称・セミ様。オガワハイムとかバビロンとか新宿とかアガルタとか散々出番が無くて、気がついたらセイレムでもう実装されないんじゃないかと思っていたらまさかのバレンタインでメインヒロインを飾る形になった彼女。『シロウに会いたい』って言ったら正義の味方のシロウと勘違いされてブチキレてなんで案件になったけど、取り敢えずチョコ作りを教えてもらう形で和解した……けど、スパムリイを見た途端にまたカオスな空気になって、あとはやたらと因縁の相手が勢揃いして同じ顔がいくつもあったり、女だと思っただら実は生えてたりして……

「なんかこう……もう余は疲れた。」

そして、セミ様は考えるのをやめた。もう目的は達成したし、もう充分だろう……ため息について玉座によりかかる。というか、今回はマジで大変だった。

チョコの噴水を見るや……

(; 0 M 0) < コレクツテモイイカナ？

カカオの木が育つや……

(; 0 M 0) < コレクツテモイイカナ？

チョコ量産態勢が整う度々……

(; 0 M 0) < コレクツテモイイカナ？

「ええい、駄目に決まっているだろうがア!!!」

ああ、駄目だ…思いだしギレしてしまった。というか、なんなのあの仮面ライダー？気がついたら『(OMO)＜ジー＞』って物陰から見てるし、量産施設が整う度にここぞと例の台詞を言ってくるし、なんか滑舌がおかしいし…アーチャーらしいが全く話が通じない。まあ、世にはバーサーカーなんちゃらかあるらしいが、そんなのが出回ったらバーサーカー涙目である。バーサーカーの意味無いじゃない。

いや、もう良い…もう終わったんだ。あのオンドウル星人からの侵略を防ぎきったんだ。あとはもう次のイベントまで一休み…

『…と、そんなセミ様の前に皆のアイドル、ブラッドスタークたん登場★』

「帰れ。」

いや、なんでこのタイミングで現れるんですかね？声のお仕事をしている今、話題の仮面ライダービルドから主役を差し置いてブラッドスタークが(*≧▽≦*)★とポーズをとりながら登場。これにはセミ様のハザードレベルではなくストレスレベルも上がる。なにしに来たのこのオッサン？

『いやいや待ってくれ女帝さんよ。俺はあんたに大事な報告があつてきたんだぞ?』

「…報告?」

『いや、まあまずきいてくれ…』と、スターク。取り敢えず、録でもないことは確かだが……

『実はこつそり、あんたのチョコでバレンティンフルボトルを造ってみてな…それを戦鬼たちに持っていったらなんか万丈が凄くシリアスな空気になっちまって……』

「おのれ外道。」

『いやいやそれほどでも……』

「誉めてない。取り敢えずなにがあつたのだ？」

『異☆物☆混☆入☆。』

「…!?!」

え？今、なにサラって言ったのこのコブラ!?

いつも余裕を崩さないセミ様も流石に飛び上がって自らの耳を疑う。バカな、自らの完璧な生産ラインにそんなことが起こりうる可能性は方にひとつも無いはず。なんかしでかしそうな奴は予め関わらないようにするか、拘束なり無力化なり色々と策を施しておいたはずなのに……

「ば、ばばばばばば、馬鹿な!?まさか……あのウヴァとかいう蟲の怪人が妙なメダルを入れたのか!？」

『違う違う、それに関してはメダルに両替(セイヤー)しておいたから実質、無害さ。』

『で、ではあれか!!無責任な科学者が奇妙な森の変な果実を!?それとも、自称・神が変なふりかけでもやったのか?!?』

『ブツ、ブー。どれもハズレ。』

「では、なんだ!?!場合によっては必要な施設は閉鎖せねばならんのだぞ!!さっさと教えんか!!」

『溶源性アマゾン細胞。』

「全生産ラインをやく止めるオオオオオオ!!!生産したチョコも全て回収!!急げええええ!!!」

ほんつつつつつつつつつと、クソだよね!!つと、スタークは笑っているがかなりヤバイ事態である。アマゾンズパンデミックを起こしたら今までの苦勞が台無しになる。というか間違はなくカルデアに殺される。

しかし、スタークが出て来た時点で御察し……既に取り返しのか

ない事態になっているのだ。

☆☆ ☆☆ ☆☆

『僕は、人間だあああああああああ
!!!!!!!』

「いいや、チョコだろ。」

ズブツとオメガに似たチョコサーヴァントを最もなツツコミをいれつつ背後から素手でぶち抜いたのは仮面ライダーアマゾン・アルファ：クラスはバーサーカーである。ふらりと庭園に来てみれば何やら騒がしいので様子を見てみればチョコレートで出来たサーヴァントたちが暴れまわっていたため応戦することになったのである。今は菜園を守るためにランサーたちをはじめ、多くのサーヴァントが奮闘している。さて、なんでこんな事態になったかというところ……

「さて、……なにをした、千翼？」

振り向くとそこには仮面ライダーアマゾンネオ……腕からは切り傷による出血。本人は無言のまま……アルファも今はそれ以上の追及はしない。

「今はこいつらを片付けるぞ。」

優先順位はチョコサーヴァント殲滅が高い。アルファもネオもそれを理解しており、迫りくる茶色い軍団へと突っ込んでいく。

一方、

「うぽぽぽ……い!!!!!!
!!!!!! エウリュアレたあ……ん!!!!!!」

隣のシリアスな空気などお構い無しにチョコサーヴァントにむしゃぶりつくのはやはり黒ひー。ここぞと本物にぶつけられない邪な欲望をぶつけにかかり、マシユが声をあげる！

「黒ひげさん!!」

「フッフッフッフ、某は騒動を比較的に被害が出ないように鎮圧しているだけですぞww。勘違いしないでほしいでござるなあwwマシユ殿w。」

この時、黒ひげは知らない……AMAZONZ絡みでふざけるとどうなるか。シリアスを台無しにするような愚か者にはそれ相応の報いがくる。徐々に彼の身体が熱を帯び始め、やがて凄まじい蒸気をあげながら彼は変異をはじめた。

「え……ちよつとまつ……身体が……なんか、あつ……い……？」

「!? 黒ひげさん!!？」

ザシユツ

次の瞬間、彼の身体は横に真っ二つに裂かれて霊子へと還っていた。異変を察したニューオメガが素早く処理したのだとマシユが気がついたのは1秒もいらなかった。

ニューオメガはマシユの安否を確認すると、周りの面々に叫ぶ！
「皆、チョコのサーヴァントに直接、触ったら駄目だ!!食べたり、傷口に入らないように注意して!!」

それから、クエスト周回から戻ってきたGとサーヴァントたちが合流し事なきを得るのであった。

☆☆ ☆☆ ☆☆

「……うむ、被害はこれで全部か？」

取り敢えず、くろひーに目を瞑って人的に大きな被害は出なかったが…アマゾン細胞混入により発生したチョコアマゾンサーヴァントたちにより施設は滅茶苦茶…ランサーたちの耕した畑は踏み荒らされ、科学者たちが造った機械類も3割近くが大破。またそれぞれ施設に循環させるパイプなんかもズタボロでチョコが溢れ出ている…

あまりの凄惨さに子供サーヴァントたちは泣きじやくり、ランサーたちもやるせない表情をしている。

セミラミスも『こうなってしまったものは仕方ない』と、これを機にサーヴァントやGに施設の片付けを命じ…今回の騒動の『発端』となったとおぼしき人物へと視線を向ける。

「さて、千翼と言ったか…？此度の原因は貴様にあるらしいな…どういった経緯があるか妾が納得するように述べよ。」

千翼…彼は項垂れていた。仮面ライダーでありながら溶源性アマゾン細胞のオリジナル個体である彼の左腕からは出血の痕。恐らく、彼の血がチョコに混入してチョコの魔力と反応してチョコアマゾンサーヴァントが発生したのだろう。しかし、過失にしろなんにしろ経緯はあるのは違いないので確認しようと言おうセミラミスだが、千翼は……

「俺が悪いんです。罰は俺が受けます。」

「質問に答えよ。妾がききたいのはあくまで真実で貴様の善し悪しも罰もそのあとじゃ。」

この一点張り。彼女はあくまで審議のためにも真実を推し測りた
いのだが……

すると、背後から鬼神に迫る顔をした仁がアマゾンズドライバーを
巻いて千翼へと向いた。

「…あんたはさがってる。子供の責任は親がとる。」

いつもの破天荒な雰囲気は鳴りを潜め、裁く者として猛禽のような
瞳が彼を見据え…アマゾンズドライバーに手をかける。しかし、彼女は譲らない。

というわけで回想はいります……

☆☆☆☆

スタークおじさん 『好き !! (挨拶)』

「わかった、もういい。もうこれだけで大体、誰が悪いかわかりましたから。」

「いや、まだ回想開始から全然経ってないんですが……」

うん、もうスタークおじさんが出てきただけでコイツが悪いってわかるもんね！流石のセミ様も心労でふらつくよ。もう、これに長い間付き合ってきたナイトローグ蒸血おじさんは実は純粋で良い奴だったんじゃないかって思うよ本当。

取り敢えず、セミ様には我慢してもらってスタークおじさん劇場を見てもらおう！（拷問）

『さて、まずはコーヒーを……うわっ、まず!!……そういえば、牛乳パツク1本分の牛乳を完全に影響が無くなるまでに埋めるには海ぐらいの水が必要なんて話を何処かで聞いたが……』

すると、スタークおじさん…自分のつくったくっそ不味いコーヒーをすうつとチョコレート貯蔵プールに……まさか……

『……なあって、するわけないよね★ もしかしてビビっちゃった???
H A H A H A H A ☆ ☆』

「スタアアアアアアーク!!!」（デイリー達成）

回想でも平然と人を弄んでくるとかももう職人である。セミ様も怒りとストレスのスーパーベストマッチでヤベエほどキレており、Gがなんとか羽交い締めでおさえつけているからなんとかなってるがもう毒の大噴火しかねない勢いだ。しかし、煽りの匠であるスタークおじさんに余念は無い。

『んじや、これは花壇のところに捨てとくか……。大丈夫、バレやしない。』
「!? やめろ…そこはシロウと大切に育てた薔薇の…?!? やめろおおおおおおおおお!!!」

非情!!もしくは、外道!!セミ様の大事な大事な花壇にコーヒー（自称）を流しこむあまりにも卑劣な行い…!数秒後、庭園の薔薇とかはなんか知らんけどあつという間に枯れてしまう!おのれ、スターク!!セミ様の悲痛な叫びが虚しく響く…

『栄養（ガス）が多過ぎたんだなこりや。まあ、良いや。』

いくら古代だろうがなんだろうが薔薇がガスで成長するわけがない。まあ、確信犯だな間違いない。

只今のセミ様の怒りストレスレベル105%……ヤベエーイー!!!!!!
『さて、そろそろ終わるかな……? おお、大漁大漁!!』

で、今更ながらスタークおじさんが何をしにきてたかという……
明らかに某・稼ぐ2号ライダーのミルクタンクのようなアイテムにパイプを接続し、チョコプールから堂々とくみあげ……もとい、盗みを働いている。あまりにも自然に悪事など行っているように見えないため通りすぎるサーヴァントたちも『きつとなんかの検査だろう』『そういえばあんな奴いたっけ?』などと多少は気にかけても不振がることはない。それにしても、胡散臭いコブラのオツサンが何故にこんなことをしているかは謎だが割りとノリノリなのが質が悪い。うん。

『さて、こんなもんか……』

暫くして明らかに許容量を超えたチョコレートを内包したタンクをポンプから外すや、よっこらせつと背負いその場をあとにしようとする。もう流石のセミ様ももう呆れの感情まで覚えはじめてきた。

……と、その時!!

「待ちなさい!!」

『お、お前は……!?!』

悪の前に立ちはだかつたのは我等がジャンヌ・スパム・ダルク・スパム・サンタ・スパム・オルタ・スパム・リリイ……!!

「あなたはカルデアのサーヴァントではありませんね!! 実に怪しいです!」

『失敬な。おじさんはカルデアのサーヴァントじゃなくても立派な声のお仕事をしているんだ……ちつとも怪しくなんかないぞ(大嘘)、スパムお嬢ちゃん』

「ジャンヌ・ダルク・サンタ・オルタ・リリイですっ!」

『長くね名前? そんな君にコーヒーミルク(毒物)をあげよう。』

「わくい☆ ……はっ!?! トナカイさんが言っていました……悪い人は物で釣ろうとするって……! 危うく、乗るところでした。危ない危ない……」

『……ちっ』

別にマスターの言う悪い人とは某髭紳士のことなのだが、ここは思わず功を奏したということか。ちよつと面倒臭くなってきた展開にスタークおじさんこつそり舌打ち。さあ、どうしたものか……そろそろ周囲の目もこちらに向き始めている。

『わかった、じゃあ飴ちゃんをあげよう。だから、皆には内緒だぞ☆』

「だから、そんな手には乗りませ………（ガブツ）……（ω、）スヤア」

だが、ここはプロ。手元の飴ちゃんに注意を引いてこつそり後ろからコブラでひと噛み。あつという間に気絶毒で眠りの世界へ直葬☆これくらい戦争を引こ起こすスタークおじさんにとっては朝飯前だ。

『さて、今度こそ失礼す……』

【BLADE Roading…】

『!? おつと!!』

…が、ここはサーヴァントたちの集まる庭園。こつそり行つたつもりでも誰かの目につくことがある。

ヒラリとブレードをかわし、距離をとるとそこには仮面ライダーアマゾン・ネオの姿があった。

「お前っ!!」

『おつと、油断したか。コイツはまずい……』

やばいな……他のサーヴァントたちもこちらに向かつてきつつかある。流石に幹部で手練れの怪人であっても英雄たちの群はまともに勝負して勝てる相手ではない。

「チョコを、かえせー」

『返せと言われて返す馬鹿がいるか…よっ!!』

バシユツと放たれるスチームガンからの弾丸。これをネオは弾き、一気にスタークに斬りかかろうとするが……

『甘い!!』

「!」

スレ違いざま、ネオはスタークを見失う……直後、右腕に裂けるような痛みが……

「……しまった!？」

気がついた時、既にネオから飛び散った赤い血が……チョコプールの中に……そして、濃い魔力を含んだ高い栄養のチョコレートの中でネオのアマゾン細胞が活発に活動をしはじめる……。

そう、最悪の事態が起こったのだ。

アマゾン細胞はそれぞれが独立して怪人として形を形成しはじめる。そして、ある程度の形を成した者から次々と本能のまま暴れはじめた。

『おっ…これはラッキーかな……?』

この騒動を好機とスタークは逃走。そして、はじまりへと至るのである。

☆☆ ☆☆ ☆☆

「……ということだったらしい。全く、お騒がせな奴がいたもんだな。」

カルデア食堂の夜……そこは、サーヴァントたちが集う大人のbarへと顔を変える。仁はそれを肩を並べてカウンター席へ座る悠に伝えていた。相席など本来の世界ならありえることのないことだが、今は休戦協定を結んで共に戦う仲間という形で落ち着いている。まあ、自分や千翼も含めて本能に負け暴走したと同時に令呪の自害が前提だが……

今はバレンタインというなごやかなイベントということで血気盛んなことは必要以上は彼とて避けているし、隣の悠も笑みを浮かべて

いる。

「…でも、安心しました。3回も繰り返さなくて。」

「…」

脳裏に過る本来の時間軸の記憶。ネオにトドメを刺し、その息の根を止めたあの感覚…：どうあつても、鷹山仁という存在が消えるまで拭えないあの感触は呪いであり、また彼にとつてもトラウマである。普通の人間ならとつくに発狂しているだろう…でも、彼は信念というがむしやらかつキツく喰いつく鎖で締め上げられたような精神でまだ狂ったままで自我を保っているのだ。その痛みは完全に彼が全て砕け散るまで呪い続ける。

「だが、いざとなつたら…：俺が殺す。千翼も…：お前も…：…」

そして、彼は砕けない。己の信念と誓いを果たすまで…

無論、それは悠も充分に承知している。だからこそ…

「わかってます。でも今は…夢を見てもいいんじゃないですか？サーヴァントになって、アマゾンを狩る必要も無いし、僕たちが同じ目的…人類のために戦える。ありえないことだらけなら、もう少しありえないことをしても良いと思いますよ。」

このカルデアは英雄が集う場所。過去のしがらみ、因縁、呪い、ありとあらゆる全てを乗り越えて隣り合う人類の未来のための揺りかご。そして、一時にありえるはずのない奇跡を垣間見る奇跡の夢でもある。なら、少しだけその鎖を緩めでも良いだろうか？

遠回しな言い方だが、仁は気がつく…

「…：千翼のことか。」

「はい。」と悠は頷いた。途端、仁はグラスの酒を煽り乱暴にテーブルにドンツと叩きつけた。

「無理だ。俺はあの子を2回も殺したんだ。そんな奴に親の喜びを味わう資格があるか！」

「あなたは父親として責任を果たして千翼に向き合った！なら、親としての喜びを味わっても良いはずですよ!!」

「黙れ!!」

激昂し立ち上がる彼。辺りの職員やサーヴァントたちも何事かと

顔をこちらに向ける……いざとなったら、力強くでも制止しなくてはならないかもしれない。緊張した空気が張りつめ……冷や汗が首筋からずつと下へ伝っていく感覚が暫く続いたが、

そこへ、「失礼……」と割って入るサーヴァントがひとり……

「…話はそれとなく聞かせてもらった。私はランスロット、円卓の騎士であり今はセイバーのサーヴァントとして貴公らと同じくマスターと共に戦う者だ。ミスター鷹山で良かったかな？まずは、非礼を詫びよう。」

「…」

ランスロット、ブリテンの円卓の騎士の中でも最強と名高い彼。真つ向から掴みかかっても分が悪いことくらいは仁もそれとなく察しテイルので黙っている。取り敢えず、暴力沙汰にはすぐになりそうにないことを確認するとランスロットは話を進める。

「しかし、私としても思うことがあり言葉を述べさせてもらいたい。

……貴公は自分の息子と接することが怖いのではないか？」

「！」

見るからに動揺していた。ピクリと止まり…何か縫いつけられたように歩が動かない。まるで、ランスロットの言葉が杭になったかのように…

「その…私も言えた身では無いのだがな、我が子に拒絶されるのが怖い…傷つけたことが後ろめたい…だから、どう接して良いかわからないのだろうか？」

「…あなたに何がわかる？」

「私も父親だ。私の場合は責任も何も果たせなかった最低の父親だが…」

そう言えば……悠はマシユの中に宿る英霊について思い出した。確か、ギアラハッド…ランスロットと同じ円卓の騎士で彼の息子。その性格は宿主であるマシユにも影響しており、ランスロットに対して

辛辣な態度を時折みせるのはこれが関係しているのだとGから聞いた：

悠もブリテンの物語についてはよく知らないが、どうやらランスロットとギャラハッドの仲は険悪だったのは明白。だからこそ、彼なりに仁に対して思うところがあるのだろう。

「しかし、親と子の繋がりは責任だけではないはず……責任を逃げる言い訳にしては、貴方も私と同じ親失格ですぞ。私が御身に何があったかは図りかねますが、同じ父親仲間のサーヴァントとしてこのカルデアの時間を大切にしたい。責任を果たす意志と力があるなら、子とだつて向き合えると私は思います。」

「…」

黙る仁。実際、ランスロットの言うことは全て凶星だつた……。本来の時間とある亜種特異点で彼は結果的に2度も我が子を手にかけることになったのである。その後、親子共々カルデアに召喚こそされたが自分はどうか接して良いかわからず、千翼もまた父親から距離を何となく距離をとってしまっていた。そのまま時間が過ぎて溝は埋まらず現在……

「簡単に言いやがる……」

最後、不貞腐れたように再び椅子に座る。悠がなんとかフオローしようとしたが、そこをランスロットが肩に手を置き『それでは、我々はお邪魔のようなので…』とその場を引きずられる形で後にする。

そして、残される仁は……

「わかってるんだよ……そんなことは…!!」

悶える。そう、言われなくたって自分が臆病で怖じけづいて…責任を言い訳にしているのは解つてる。でも、良いのか？無責任にこの世に命を与え…責任という言葉を振りかざして命を理不尽に奪った自分に父親として本当に千翼は認めてくれるのか？

怖い……怖い怖い怖い怖い怖い

七羽さん（甘えさせてくれる人）はいない。

七羽さん（寄り添ってくれる人）はいない。

七羽さん（愛してくれた人）はいない。

七羽さん（千翼の母親）はいない。

……どうしたらいい？どうしたらいい？

「あの！ 父さん!!」

「っ!？」

その時、一番に心臓を殴りつけるような声が背後でした。振り向くと、そこには一番に会いたいが会いたくない相手が立っていた。よりにもよって……今……

「千翼……」

何故、ここに……ああ、それで悠とランスロットは察して立ち去ったのか……!

まあ今更、そんなこと考えたって遅い。静かに低い声で……仁は問う。

「……何の用だ？」

違う、そうじゃない。こんな脅すような声じゃなくてもつと父親らしく話したいのに、脳ミソが上手く語彙を紡げず、口を思うように動かない。これが戸惑いと怖さからくる裏返しだと自分で理解しているぶん恥ずかしいし怒りすら覚える。

それでも、千翼は臆せず手元の包みを父親に渡す。

「これ……バレンタインだから！」
「……？」

「チョココレート……お世話になった人に渡すってマスターから聞いて、頼光さんたちと一緒につくってみたんだ。だから、父さんに食べてもらいたくて……」

…放心した。だけど、すぐに我に戻る。バレンタインで父親にチョココレートをおくる息子など普通はまずありえないが、これの意味は何なのか……まさか、仲を縮めたいという意志のある種の表現なのか……そうならば、彼の行動力に応えるべきだろう。

「……俺になのか？」

「うん。もしかして……チョコ嫌いだった……？」

「いや……そうじゃない。そうじゃないんだ……」

しかし、その前にハッキリさせなくては……

「なんで、俺に渡す？ 仲が良い奴なら他にもいるだろう……」

「……父さんと仲良くしたいんだ。俺が生きてる時は出来なかったから……だから……!!」

「俺はお前を殺したんだぞ？ 勝手に生まれさせて、勝手に殺した最低の父親だ。そんな奴と仲良くしたいって本気で言っているのか？」
「……」

「マスターとかに薦められたっていうのならやめておけ。お互いのためにならない。」

彼は本当にどう思っているのか、確めなくては。ただ、周りの空気に流されて仕方なしにやっているならお互いに重荷になるだけだ……。まだカルデアに来て日が浅い仁だがマスターをはじめランスロットといい、お節介焼きが多いのはもううんざりと熟知しているのだから。彼等なら千翼に気乗りしなくてもそう仕向けてもおかしくはない。しかし、

「違うよ。これは俺の意志。俺の意志でやったことなんだ。」

(…！)

我が子は怯まず、自分の胸の内を伝える。

「父さんとは命のやりとりでしか今まで繋がってこれなかったから、ちやんと親子として向き合いたいんだ。こんな機会はもう無いかもしれないから…！」

「…」

暫く動けなかった。まさか、こんなに千翼から寄り添ってこようとすると予想すらしなかった。不意討ちの強打は仁によく効いており、弱点にクリティカルに入ったダメージは脳内のパニックを招く。

そして、恐る恐る包みを受けとると『開けて良いか…？』の一言。千翼が頷くのを確認すると赤い袋から小箱が…その中には鳥を模したチョコレートが入っている。

「…かわいいなあ。七羽さんもこんな趣味だったけなあ…」

ひとつとつて頬張るとむしゃむしゃと咀嚼する。甘い…ああ、なんて甘いんだろう。チョコレートなんて食べたのなんかいつ以来か覚えてないけど…多分、この先にこれより美味なものを口にすることはないだろう。

「おいしい、父さん？」

「ああ、おいしいよ千翼。ああ…あ…俺には勿体ないくらい、おいしいよお…千翼お…」

気がつけば涙腺から滴が零れおちて止まらなかった。畜生、嗚咽が邪魔しやがる。

「すまねえなあ…こんな情けない父親でよお。本当、こんなどうしようもない奴の息子で、ごめんなあ…」

…その後の鷹山親子についてまたいつか語るとして

(…さて、私も腹を括らねば…)

場所はかわり、ランスロット。とある廊下にて……
彼の目の前には

「こんにちは、ランスロット卿!!相変わらず、外は吹雪ですが本日はお日柄も良いですね!!」

「ま、マシユ……」

娘（仮）。うん、なまじ大見栄をきつたからには自分も逃げられない。背後は笑顔で堅められている……退路はすでに絶たれたということか。

「ところで、今はバレンタインデーですね!!!」

「む、むう……」

「私も日頃、お世話になってる方にチョコレートを用意したのですが!! うっかり、作り過ぎてしまって、残してしまっただけは非常に勿体ないので、別に、世話になった記憶などこれっぽっちもないですが、

しようがないので、余り物ですが差し上げます!!」

「……あ、ありがと……」

「チェストオ!!!」

ズドンツ（チョコを渡す音）

その後、ランスロットはカルデアの廊下の片隅にとんでいってチョコレートを抱き締めたまま死亡しているのが復活した黒ひげに発見される。本人曰く『親って難しい……』と言い残しており、美女による看護を要求したため、望み通りにナイチンゲール女史のもとへ搬送され蘇生を受けている（はず）。

その頃、当のマスターはというと……

「……マスター、こころして聞け。」

マイルームには仮面ライダースナイプこと花屋大我先生：別名・ブレイブいわく無免許医。でも、ちゃんと医療知識も技術もある。今、マイルームは大我先生の診療室……患者はマスターであるG。別にゲーム病とかそういうわけじゃない。ではなにかという……

「診断の結果、お前は……」

「糖尿だ。」

その日、カルデアのマスターは泣き崩れて復帰出来なかった。

おわり

仮面ライダーアマゾン・オメガ編

DELINEATION・I

side???

…アマゾン細胞

または人喰い細胞とも言うべき、人工生命体。これの集合体によってデザインされた異形を『アマゾン』と呼ぶ。アマゾンはその由来故に人間のタンパク質を好み、本能のままに人間を襲い喰らう。

そう…勿論、僕だって例外じゃない。なのに、なんで…僕は『仮面ライダー』に……

★☆☆☆☆

マイルーム…

「令呪を持って命じる、食人衝動を抑えろ…アサシン。」

ギユイン!!と走る閃光がGの右手から迸り、嵐のように体内で荒れ狂う魔力の奔流を青年は黙って噛み締めて耐え…やがて沈静化する。額の汗を拭って、ふう…と顔をあげた。彼…『水澤 悠』は魔力の痛みと忌むべき衝動熱が引いていくのを感じ、わざわざ大事な令呪を使ってくれたマスターに礼を述べる。

「ありがとう、マスター。これで、暫くは衝動を抑えられるよ。」

水澤悠…仮面ライダーアマゾン・オメガ。風都ではバーサーカーだった彼だがカルデアではアサシンのクラスチェンジし、雰囲気もかつてより大人びていた。彼は仮面ライダーであるときれるが、同時に人を喰らう怪人・アマゾンでもある。それはサーヴァントになっても変わり無く、魔力供給のおかげで食事の必要が無いサーヴァントであつても『食人衝動へアマゾンの本能』は健在であつた。これはもう

アマゾンとしてのあり方として仕方ないものなのだらしい…

よって、マスターであるGが令呪を使用することで強引に人間の血肉を欲すアマゾン細胞を抑えつけている。

「気分は悪くない?」

「平気。毎度、迷惑をかけるねG。本当はこんなつもりじゃなかったんだけど……」

「悠は悪くないよ。」

悠としてはとても申し訳ない限りだった。今の自分の燃費の悪さは下手なバーサーカーより悪いし、最悪の場合はGやカルデアのスタッフ：他のサーヴァントにて危害が向かいかねない。こんなつもりで契約したのではないのだが……

(何でだろう…生身の頃より、アマゾンの力が制御できない。もうバーサーカーでもないのに……)

…バァン!!

「マスター、助けてくれ!!」

その時、マイルームに飛び込んできたのは貴利矢…その後ろにはシャアア!と怒りの形相の嘘つき絶対に許さねえガールキよひーこと清姫。彼はGを盾に後ろへ隠れ、まさに焼き殺さんばかりの勢いの清姫はジリジリと狙う……これでは、Gまで丸こげにされかねない。「退いて下さい旦那様!この嘘つきを焼き殺せないではないですか!!」

「大袈裟な!ちよつとジョーク言っただけですよ自分!?あ、ちよつと火とばさないで!?!大事な一張羅が黒くなっちゃう!?!」

(…関わりたくない。)

流星にGも白目。まず、初対面から胡散臭い奴認定を清姫から受けた貴利矢……以来、仲はすこぶる悪い。まあ、時と場合によって真実を伏せたりポーカーフェイスなど行う彼と何があらうと愛想や気遣

いだらうと嘘であれば何であつても許さない彼女とでは相性が良いはずもないだろう。取り敢えず、Gの制止でまだ黒焦げにならないでいるが……

そんな様子を悠は微笑みながら眺めていた。

(騒がしいな……。でも、悪くない。)

…この愉快的な空気はサーヴァントになる前は感じる機会など殆ど無かった。あつたけど、本当に短い時間だった。別に自分もあの輪に入ろうなんておこがましいことは思わない……。ただ、いつまでも続けば…なんて、思つたけど…

「…！」

ードツクン

やっぱり、そうもいかない。

【マスター、至急管制室へお願いします！】

天井のスピーカーから響く緊急事態を告げるマシユの声。一転してあわただしくなる空気…Gはマイルームを飛び出し、勢いに乗じて貴利矢も清姫の追撃から逃れる。

…さて、自分も向かわなくては

悠もまた、Gのあとを追って駆け出した。

★☆☆☆☆

…亜種特異点 新宿

今回の目的地であるこの場所はかつて亜種特異点の舞台になった場所。ネオンの輝きが交錯する美しい夜の街並みだったが：人理修復が進んでいるためか以前に比べれば七色の光は弱々しく、ビル街には人も魔も気配も皆無。

そこへ、カルデアにいるマシユからのオペレートがGたちに届く。

「マスター、今回の特異点の類似反応はこの新宿から観測されています。それほど強力ではありませんが、周囲に何かしらの異常は確認できませんか？」

「…特には見当たらないけど？」

見回たす限りでは特にこれといった異常は無い。最初にこの新宿に来た時には既に大半の一般人と定義される人間は皆、死に絶えていた。生きていたと言えるのはサーヴァントと悪辣な金持ちに魔術師もどきのチンピラくらいだった…。

そんな魔境の街に連れてきたのはジャンヌ・オルタにセイバー・オルタ：あとは、自主希望で清姫と悠。前者はかつて、この新宿で縄張りを張っていたこともあり頼りになるだろうと連れてきた…

…のだが…

「では、マスター…私はあのファーストフード店を見回ってくる。何やらあそこから怪しい匂いがするのでな…」

「えっ？」

…と、セイバー・オルタが消え

「なにやってんのアイツ？あー、私もあの服屋怪しいと思うわ！ちよつと偵察してくる。」

「ちよっ！」

…と、ジャンヌ・オルタが消えた。

もう何なのこのオルタちゃん。自由すぎる。因みにこのあと、騎士王オルタちゃんが行った先で人肉ハンバーガーを出されたためにブチキレて店舗をモルガンして粉砕するのは誰も知らない。

結局、残ったのは清姫と悠。清姫の場合は現代の時代への興味という理由で悠は何やら思うところがあるらしく同行してきた。(貴利矢ん？あく、自分は本編で今日出番が(大嘘へゴルフ))

「本当、緊張感の無い人たちですね。流石の私も怒りどうこうより呆れます。」

「まあまあ。悠、何か感じる?」
「…」

取り敢えず、悠までいなくならなかったのは幸이었다。彼は現場でマスターから離れずにある程度の索的が出来るのでかなり有難い。
「……!」

すると、暫く周囲を睨んでいた彼は昔のライブハウス…所為、ディスクの前まで走っていき扉の前で足を止める。

「ここだ。ここに、居るッ!」

「ディスクか…時代感じるなあ。」

Gは自分が生まれる数十年前に消えた遺物に呑気なことを口走っていたが、彼の表情からはかなりの警戒心が窺えるほど怖い。マシユからも『恐らく、そこが今回の起点です。』と通信が入り気を引き締めなおす。

「G、俺から離れないで。清姫も辺りに注意して…」

警告。今、Gには風都で味方をしてくれたベルトさんはいないため自衛手段は礼装と精々、ガンドくらいだ。加えて、いつもなら一緒のマシユはバックアップにまわり清姫はあまり戦闘に強いサーヴァントではない。現状、一番頼りになるのは悠のみだ。

息を呑み、ギイイ……と開けるディスクの扉。中では極彩色の光と耳が痛くなりそうな爆音の音楽で溢れ、中はゴミやら汚物やらで荒れ放題。ミラーボールが乱反射しているが、リズムに乗る観客など生憎いない。

「マスター、どうですか?」

「…目立つようなものは見当たらない。」

マシユのナビゲーシヨンを疑うつもりは無いが、このあらゆる新宿ではさして珍しくもない気もする。普通に管理者の人間が死んだとか……？

一方、悠はステージの上へと上がりグルグルと周りを見る……………

『シユウウ…………ツ!!』

…その様子を涎を垂らしながら窺う影…

「! マスター、上だツ!!」

「!」

『シャアア…………!!』

天井から襲いかかってきたのはコウモリアマゾン! 鋭い牙は新鮮な人間の血肉を求め、勢いよくGの頭上目掛けて急降下してきたのだ…!!

「旦那様、下がって!」

…しかし、間一髪。ゴウツ!!と放たれた清姫の炎により阻まれたために、異形はバランスを崩してあさつての方向へ着地する。

「やはりか……!」

『ギイイイ!!』

「…くっ!?」

すぐさま、引き返そうとした悠だったがこちらはクモアマゾンがステージの裏方から飛び出して行く手を阻む! 仕方ない…………彼はアマゾンズドライバーを取りだし、腹部に装着し起動させる。

【OMEGA】

「…アマゾンツ!!」

無機質な音声が発せられるとグリップをまわし、全身のアマゾン細胞を活性化させ己の狂暴な『力』を解き放つ…………

【E・E・EVOLUTION】

ーゴオオオオオオオオオオ
!!!!!!!

『進化へEVOLUTION』：緑の炎に包まれ現れた姿はそう言ってもいいかもしれない。人間という皮を喰い破り、表層へ出て来た悠の『Ωの名を冠する怪物へアマゾン』……

仮面ライダーアマゾン・オメガが衝撃波と共に君臨した。

↓↓↓DELINATION・II へと続く。

DELIN EATION. II

「…オオ!!」

降り下ろされるクモアマゾンの爪を払いのけ、パンチにキックと叩きこむオメガ。幸い、思ったほど技術は落ちておらず生身と同様のテクニクで充分に相手に出来る。出来るのだが……

『ギギギギ…!!』

(ツ……力が出ない!)

問題…かなりのパワー不足。生身の自分なら一方的に圧倒できる相手のクモアマゾンだが、ダメージは蓄積すれど勢いは留まらず挑みかかってくる。加えて、オメガが戦いに集中出来ない理由が……

「ええい、ちよこまかと!」

「清姫、周りに燃えうつってる! 気をつけて!!」

Gと清姫である。Gはガンド程度しか対応が出来ないために必然的に清姫が出なくてはいけなくなるのだが、如何せん彼女は守りを得意とするサーヴァントではない。自分はまだ変化のスキルによる竜化で防御力は上げられるが、マスターを護るには捨て身の盾になるのが限度だ。となれば、彼女に残されるのはありつただけの火炎放射をばらまいて弾幕を張るくらいだ。逸話通りの愛(増悪)した人を焼いたそれはまあ強力な炎だが、これまた相手が悪い。室内という閉塞された空間なれどダンスホールというそれなりに広さがあればコウモリアマゾンの飛翔能力にはそこまで障害にはならず、炎は機動力によってかわされ続けている。おまけに、この炎はダンスホールの至るところに燃えうつりはじめていた…。このままではディスプレイ中に火が燃え広がるのも時間の問題だろう。

…と、目線を逸らしたのが仇となる。

『シユシユツ!!』

「!…しまった!?!」

クモアマゾンが放った糸の網がオメガに吹きかかり、床に貼り付けにされてしまう。そのまま、クモアマゾンは飛びかかるやマウントし捕らえた敵を勢いのまま滅多打ちに……

「……………ぐっ!? あ!?!」

「悠さんー…ちい!!」

飛び散る血。何とか清姫も助けようとするもこっちはこっちでコウモリアマゾンが阻む。彼女の意識が少しでも護りから逸れたのを執拗に狙い、隙あらば後方の人間へマスターを喰いちぎらんとする。されど、この程度の劣勢…人類を救ったマスターには何を今更という話だ。

「ガンドー!」

バシュツ!!と放つ黒い魔力弾がコウモリアマゾンの合間を縫って、離れたクモアマゾンの顔面を砕く!

『ギギギギ!?!』

「悠!」

「!」

この機を逃さない。オメガはアマゾンズドライバーのグリップへなんとか手を伸ばし、これを捻って腕のアームカッターを展開。纏わりつく粘着質な糸ごと彼は悶えるクモアマゾンの胸部を斬りはらうツ!!

【VIOLENT PUNISH】

ズジャツ!!

無機質な電子音の死刑宣告に…生き物の身体が千切れる生々しい音。辛うじて背部の皮一枚で繋がった肉塊からドス黒い噴水が立ち昇り、ベトベトとオメガの翠色の表皮を汚す…

この相棒の絶命の瞬間を見たコウモリアマゾンは戦況の流れが敵

側に変わったのと自らの生命の危機を察し、慌て清姫から離れるや燃え朽ちる壁に突撃して強引にその場から離脱した。

【疑似特異点反応、移動しますー！】

「逃がしちや、駄目だ！清姫!!」

「承知しました。逃がしません…。」

マシユのオペレートと同時にGの指示。清姫はコウモリアマゾンを追うためにこの場から霊体化…オメガも続くためにジャングレイダー…所為、バイクを呼び出しGを後部座席に乗せディスクを扉を突き破り飛び出した。そして、清姫の気配を追ってハンドルを切りアクセルを蒸かす。華やかな夜道を駆けるジャングレイダー…そこへまたマシユからの通信が入る。

【悠さん、今のエネミーは…】

「ああ、『アマゾン』だよ。人を喰う怪物…！」

【…やっぱり…】

彼女はカルデアの計測器から今回のエネミーたちの霊基を観測し…彼等が非常に悠々アマゾン・オメガと近い霊基パターンを持っていることを知った。まさかと思ったが、やはり結果は予想通りとオメガからの答。つまりは…

「待って悠、それって…」

【…】

……彼の戦う理由。

Gとマシユは既に知っている。悠が自身の物語でどう『線引き』をしたのか…

つまり、自分たちは彼に何をさせて何をさせようとしているのか…

すると、オメガは応える。

「…良いんだよ。この新宿（時代）が僕達の時間にくくかはわからないけど、少なくとも今はアマゾンが産まれているはずが無い…産まれてちやいけないんだ。だから、狩るだけ…何も気にしなくて良い。」

アマゾン：と呼ばれる異形が産まれた正確な時間とはとにかく、彼等が人間の世界に放たれたのは西暦2000年代である。つまり、この人喰いがバブル時代の新宿にいるわけが無い。則ち、彼等はこの時間に置いて存在しないはずの異物なのだ。そうなれば、狩るには充分な理由になる。

オメガは冷静に語り、角で再びハンドルを切った。

(そう……ここに僕の護るものは無い。でもっ……)

狩るべきものは狩る。それが今の水澤悠Ⅱ仮面ライダーアマゾン・オメガの戦い。

何度も言い聞かせた言葉を胸に再度、唱えながらふと……ある場所でジャングレイダーを止めた。コウモリアマゾンと清姫の気配もそこからする……だけど、

「……は……」

知っている。一見、物静かで砂ぼこり臭い廃車置き場……

『悠？』と首を傾げるGを後に座席から降りると錆び付いた柵の扉を押し開けて中に入るオメガ。先の新宿の街並みが嘘のように光も音も不気味に静まりかえり、生き物の気配すら無く……風が廃車の隙間をヒュウヒュウと無機質に吹き抜けている。

「……特異点反応、清姫さん共にこの先で動きません。先輩と悠さんからは何か目視で確認できませんか？」

「悠、どう……？悠……？」

後方でGがマッシュが通信をしているが、オメガの耳には届かない。

「なんで、なんで……？」

自分の記憶を切り取ってジオラマにしたようだ。

この場所はとももある種の深い意味合いがあった所にとっても酷似していた……。奥にある廃車置き場の主の小屋に車の座席に押し込まれた『人間の死体』。脳裏に甦る身勝手に最低最悪な人間……傷つけられた仲間。

……何で？

……どうして？

『ココハ、才前ノ【線引き】トヤラニ強ク影響シタ場所ダカラサ。』

「!」

唐突にかけられた声にオメガは顔をあげる！廃車の積み上げられた山の上に満月をバツクに『奴』はいた…。見覚えのある異形のシルエットに左手がぐったりする傷だらけの清姫の頭を鷲掴みにし、オメガとGを見下ろしている。

「仁さ……いや、……お前は誰だツ!!」

オメガは一瞬だけある男の名を呼びかけたが、違和感に正体は彼ではないと察す。すると、奴は鼻で笑うと清姫もろとも飛蝗の如く飛び上がり…彼の前に着地。目線の高さに来るや白い月光に照らされ、正体を晒してみせ……Gは目を見開き戸惑い、オメガは警戒心をマックスまで上げる。オペレートしていたマシユも『え…?』と一瞬だけ思考が止まった。

確かに『奴』は異形だ、間違いない。だけど、…その翠のボディは……赤い複眼は……

『ヨウ、俺へ兄弟〉…?』

…オメガだ。アマゾン・オメガからベルトを外して刺々しく有機的に…いや、怪物らしくしたと言ったほうが解りやすい。

オメガを俺へ兄弟〉と呼ぶアマゾン。対する彼は問いかける…

「何で、…何でお前が外にいるんだよ!？」

ありえない。ありえてたまるものか…自分の『本能』が自分の目の前で形を得ているなど!!

タイミング同じく、マシユからのオペレートが入る。

【目の前の敵性とおぼしきサーヴァント、解析結果が出ました。クラスはバーサーカー…そして、霊基パターンは非常に悠さん…仮面ライダーアマゾン・オメガと酷似しています…】

『アタリマエダロ? クラスが違ウダケナンダカラサ。』

異形…取り敢えず、この場では『オメガオリジン』としておこう。奴の言うクラスが違うとは…?

サーヴァントとはそもそも、英霊から剣士や魔術師といった側面を(一部、例外こそあれど)削ぎ出して現世に召喚したものだ。例えるなら乱暴だが、切り分けられたホールケーキのようなといった具合。元々は同じだが、別々に成ってしまった存在…それがサーヴァント。ややこしい言い方になるが、オメガとオリジンは同一人物であり別々の独立した意識を持つ別人なのだ。

『アア、良イネ…ヤツパリ生身ハ自由デ良イ。』

オリジンはボキボキと首や指の関節を動かして鳴らす…まるで、その感触を味わうように。そして…

ーガブリッ
!!!!

「…ああっ!？」

持ち上げた清姫の首筋目掛けて牙の並ぶ口で喰らいつく!!

「その娘を離せエ!!」

すぐさま、彼女を救うため突撃するオメガ。直後、オリジンとの
アームカッターの衝突が起こり火花が散る！

『自分ノ狩ツタ獲物を喰ツテナニガ悪イ?!!』

「ふざけるなア！」

ーガキイイン!!

響き渡る衝突音。これが、更なる戦いの狼煙となった…

↓↓DELINEATION. Ⅲへと続く

DELI NEATION. III

…人間がいた。

ソイツは他人を傷つけ、辱しめなければ生を実感出来ないどうしようもない奴だった。

…男がいた。

男はどんなに救いようが無い罪人でも、力を人間には絶対に振るおうとはしなかった。それが、彼の『線引き』……

☆☆☆☆

「オオオ!!!」

『グルアア!!!』

互いのアームカッターが相手の身体をかすめ、ドス黒い異形の血飛沫が舞う。直後、オリジンは清姫を投げ捨てると飛び退いて態勢をたてなおそうと距離をとる。この隙にオメガは血塗れの彼女を抱き上げ、駆け寄ってきたGに引き渡した。

「マスター、彼女を頼みます！」
「わかった。」

数秒後、再び戦線復帰する両者。オメガが殴りかかるが、素早くオリジンは彼の頭上を飛び上がり肩を蹴つ飛ばして背後へ。そのまま、オメガの背後に飛びつくや首筋に喰らいつきキバを立てる！

「ぐっあああああ?!?!」

苦悶の声をあげるオメガ。引き剥がそうと頭を掴み振り払おうと暴れるが離れようとしなない……ならばと、アマゾンズドライバーのグリップへと手を伸ばしアームカッターを展開する！

【VIOLENT PUNISH】

「ぐっ!!」

そのまま、後ろへ風ぎはらわれた刃はオリジンの脇腹を穿ち…流石の狂暴な異形もこれには離れずにはいられない。さて、引き剥がすことには成功したがオメガの首筋からはおびただしいドス黒い出血が起こり想定外の大きく蓄積したダメージに片膝をつく。一方でオリジンは脇腹の傷こそあれど、まだまだ戦闘は可能なようで再び雄叫びをあげながら獲物へと跳びかかる…!

ーバシユツ!!

『!』

…が、空中で黒い弾丸が当たりバランスを崩し不時着。見れば、清姫を庇いながらもガンドを放ったGの姿。

『チツ…』

すると、オリジンは狙いをサーヴァントからマスターへと変えた。手負いの獲物を抜き去り、目障りな蠅を潰さんと地を駆けるツ!無論、Gも身構えるが…

『ギギギギ…!』

「…なっ?」

不意をつき後ろから何者かに羽交い締めにされた!振り向けば、コウモリアマゾン…しまった完全に忘れていた。オリジンの爪先が新鮮な血肉を引き裂かんと空を切る……されど、怪人の力の前にはただの人間である彼では抜け出すことは不可能に近い。

やめろ

手を伸ばす…だが、届かない。

はっ!?と我にかえった彼は辺りを見て自分が何をしてしまったかを理解する。

「……そんな……どうして……」

…それが、お前の『本質』だからだ。

「!」

抑えきれなかった自分に困惑する…と同時になが歩み寄ってくる新たな気配。車の影からゆつくりと現れたのはオメガと同じ『仮面ライダー』であり、『怪物へアマゾン』だった。だが、アマゾンズドライバーを身につけてこそいるが姿はオリジンと酷似しており、色は無機質なグレーで眼が紫色に灯っている。

馬鹿な…確かに自分がサーヴァントになっているならあり得なくは無いだろうが、よりにもよってこのタイミングで現れるのか!?

「初めましてだな……カルデアのマスター。お前たちの流儀にあわせて言うなら『仮面ライダーアマゾン・シグマ』とでも名乗っておこうか。」

『Σ』…そう番付された名にアマゾンズドライバーからしてオメガと同様タイプの仮面ライダーだろう。ただ、このタイミングで現れたのとオメガの凄まじい警戒具合からしてとても友好的な存在とは思え

ないが…

【霊基情報、出ました！これは…『ルーラー』!?ジャンヌさんと同じエクストラクラス!!】

「…何だった!?」

更に、マシユからの衝撃の報告。『裁定者へルーラー』とは本来の聖杯戦争において通常なら召喚されず、適性を持つ英霊もまた限られてくるクラス。エクストラというだけあって、能力は強力で真名看破など基本7騎には持ち得ない固有スキルを持っている。それが、仮面ライダーでアマゾンなどと全くGたちは予測すらかなわない。

これは彼を知らないが故の話であり、彼を知る者へオメガからすれば話は別。

「お前！何でサーヴァントに…!?」

「決まっているだろう。抑止力だ…人の歴史を脅かす害を排除する。それは、貴様がよく解っているだろう。」

シグマがオメガを指さす。

『抑止力』…人の歴史の存続に害悪・消滅の危機を与える存続に対する世界の防衛機構。召喚された土地かまたは害悪性存在に縁のあるものが世界により呼ばれ特異点においてもこれに該当するサーヴァントと遭遇したGは契約を結んだりすることもあった。

されど、シグマの言い回しは…まるで、オメガを『害悪』だと指しているように…いいや、確実に指していた。侮蔑するような視線がその証拠だ。

「…カルデアのマスター、貴様は甘い。コイツは紛れもない人喰いだ。人間に仇なす者…相容れないもの。そして、俺はアマゾンを狩るために産み出された者。即刻、この虫との契約を破棄して俺と契約すべきだ。」

そして、Gとの契約とオメガとの契約破棄を持ちかける。いきなり出てくるなり何を…とGが後退りするや、不思議そうに首を傾げた。「何を躊躇う？正しい選択など見るに明らかだ。俺は人喰いの衝動は無い…それにエクストラクラスの霊基もある。何が論理的かは考えるまでも無い。」

仮面ライダーアマゾン・シグマ…正確には『Σ』と分類されるアマゾン怪人にはある理由から仮面ライダーであるオメガですら持つ食人衝動が全く無い。つまり、令呪で縛る必要も無く…また、ジャンヌや天草四郎と同じルーラーのクラスならば強力な戦力になることだろう。何よりも…

「ゴイツが戦う理由は人類史が減れば必然的にアマゾンが産まれなくなるからに過ぎない…ただの利害の一致に過ぎないだろう。」

Gと悠の契約はあくまで利害が一致しているということ。アマゾン怪人は人の手によつて産み出された怪人であるが故に人間の存在が無かったことになれば親無き子が産まれようが無いように誕生しようが無い。確かに、とつくに全ての黒幕である統括局ゲーティアは葬られたが未だに残る亜種特異点など不穏な影を拭いきれないためにズルズルと協力関係にあるに過ぎない。

「G……」

最も見られたくなかった異形の側面を見られてしまったオメガ。仮面ライダーという形の枷からはみ出た力は危険な因子そのものと戦慄させるには充分だ。

「……」

「？」

「……悠は人を襲わない。悠は仮面ライダーだ！」

「！」

Gはそんな計算人間ではない。悠は…仮面ライダーアマゾン・オメガは何度も共に死線を乗り越えてきた仲間だ。理屈や損得云々では無いものでマスターとサーヴァントの関係にある。ポツと出て来ていきなり自分が優れているだの契約破棄させろだの言つて、はいそうですかと言はずが無い。

すると、見かねた清姫が立ち上がりシグマに問う。

「シグマさん…と仰いましたか？私も訊きたいことがあります。貴方がルーラーというのなら聖杯にかける願いは無い…のだと同じルーラーの方から聴いておりますので貴方もそうなんでしょう。なら、何のために戦い…何のために旦那様と契約するのですか？」

戦う理由。カルデアにいるサーヴァントは皆、理由があつてGに協力している。人類史救済に協力したい者や冒険を共にしたい者、清姫のようにGを慕う者など様々。なら、シグマはどんな思いでマスターに悠を排除させてまで契約しようと言うのか…

「……それが合理的だからだ。俺に人を喰う衝動も無い上にエクストラクラス、申し分ないだろう?」

合理的。そう簡単に言い放たれたどのサーヴァントよりも淡白か理由。オメガより利点が多い、ただそれだけ。

この答に清姫は顔をしかめる。

「気に入りません。私、嘘は大の嫌いですが血の気の通わないような理屈も好きません。つまり、旦那様より都合の良さそうな魔術師が現れればそちらに乗り換えることも意にかえさないということでしょう?」

随分と突飛した解釈…まあ、0か1の清姫の狂化思考回路なら仕方あるまい。されど、

「ああ、そちらが合理的…であればな。」

シグマの答もまた耳を疑うものだった。これが契約を持ちかけるサーヴァントの言い分だろうか…

この答と同時に清姫はキツとシグマを睨みGへと警告した。

「マスター、どうやらこちらの方は敵のようです。言葉の全てに嘘は感じませんが、明らかに自分の意思で口を動かしていないのは明らかですわ。」

「ほう?低ランクのバーサーカーとはいえ、少々悔り過ぎたようだな。」

真実。一転してシグマは敵として構えをとる。

咄嗟にオメガと清姫も臨戦態勢をとり、マスターを守るための陣形を組む。

「悠、俺はお前を信じる…!」

「G…ありがとう。」

—ドツクン!!!!

「!」

その時、オメガが光に包まれアマゾンズドライバーが変化する。鋭い獣の眼のような赤いベルトに注射器のようなパーツがついたそれはアマゾンズドライバーの発展型『ネオアマゾンズドライバー』である。

「貴様、それは…!?!」

危険を察したシグマ。咄嗟に襲いかかるがオメガがネオアマゾンズドライバーを操作するほうが早い。

【V.O. ME. GA.】

「ウオオオオ!!! 霊基再臨へアマゾン<ツ!!!」

—ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

吹き荒れる緑の熱風!シグマを弾きとばし機械的な模様を描きながら、オメガのボディは変化していく……。不完全ながら銀に輝く機械的な鎧が上半身に覆われ、翼のようなバイザーが顔に形成される。

『仮面ライダーアマゾン・ニューオメガ』

オメガの秘める力を更に引き出した姿だ。

【霊基再臨!? 触媒も無いのになんで…?!?!】

その変身はオペレーターであるマシユも驚いた。本来、カルデアのサーヴァントはその特殊な召喚である故か本来の力より僅かしか力が出ない。故に力を取り戻すためには触媒となる素材を用いた育成・霊基再臨が必要となる…勿論、仮面ライダーのサーヴァントも例外ではない。しかし、オメガは触媒など無しに新たな段階…否、本来の力を取り戻してみせたのだ。

「マスター…!」

「悠、任せた!!」

「!」

一声。それだけで充分だった…信頼していると背中を押す。ニューオメガは地を蹴り、真つ直ぐにシグマへとむかう。咄嗟に腕を突き出してガードするシグマだが降り下ろされるアームカッターに力負けし、弾きとばされる。何とか、踏みとどまるもそこへ清姫の炎が追い討ちをかけた！

「シャアアアッ!!」

「…ちっ」

直撃するやあつという間に炎がまとわりつくが、力任せに振り払う。

「ヴオオオ!!!」

無論、そこから反撃など許さない。一気に距離を詰めたニューオメガの荒々しいラツシユがシグマの腕を裂き胸を裂き、眼を殴りとばす。飛沫をあげる反り血、ドス黒く染まっっていく両者のボディ…

【AMAZON PUNISH】

「…オオツ!!!」

【VIOLENT STRIKE】

「…ッ」

そして、一瞬の間合いが空いた時…オメガのアームカッターとシグマの回し蹴りが激突したツ!!死の三日月が喰らいあい、獲物の命を刈り取るためだけに最高の威力を叩き出す！

キチキチと軋むアームカッターと亀裂が入る脚…振り抜いたのは…

「…オオウ!!」

—斬!!

ニューオメガの一撃。シグマの脚をへし折り、バランスを崩した所へ容赦なく顔面に拳を叩きつけた。全体重とパワーを乗せた一発は

いくらアマゾンといえど骨を粉碎するには充分だっただろう。地ま
で碎ける音と共に彼は動かなくなつた…。

「…やったのか？」

「…」

決着はついた。終わつた……………

血をはらい、Gの元へと戻つていくニューオメガ。

「……………待て。」

「!!」

しかし、息絶えたはずのシグマはムツクリと立ち上がる。首と脚は
あらぬ方向に曲がつているが、力任せに元の位置へ戻す。普通の生き
物なら…いやサーヴァントだつて麻酔も無しにやれば激痛に悲鳴を
あげ失神してもおかしくない行為を平然とやり、逆に見ているGと清
姫が顔をしかめる。一方、ニューオメガは振り返ると構えることなく
その様子を見据えていた。

「シグマタイプの特徴か……………」

「……………お前のデータは壊れた。5手で詰ませてもらう。」

小枝のほうはまだ安定するような足を踏み込み、神経と筋肉だけで
かろうじて支える碎けた首をもたげながら突撃してくる…いざこれど、
ニューオメガは動かない。

「悠!」

Gが叫ぶ!…が、ニューオメガは冷静に言い放つ。

「大丈夫。もう、彼は何も出来ないよ。」

「……！」

このタイミングと同じく、まるでプツツと糸が切れたように地面に転がるシグマ。踞る彼の身体からは……随所から融け……崩壊がはじまっていた……

「シグマタイプ……ダメージを感じないかわりに、自我も無い。それこそが強みで致命的な弱点の……兵器としてのアマゾン。」

ニューオメガ……悠は思い出していた。このシグマと戦ったのは初めてじゃない。その時も自分のダメージを認識出来ず戦闘続行した結果、限界を突破して今のように倒された。あの場合は倒すことで頭がいっぱいだった……今は崩れていく彼がとても哀れに見えた。彼だって、元々は『人間』だったはずなのに……

「……自我が無い……？それは違う……」

「……！」

そんなニューオメガに……否とシグマは語る。

「シグマタイプにも自我はある……ただ、『記憶』に価値を見いだせない……何も感じない。サーヴァントになったところで、所詮は『死体』……願いになるはずのものがわからない。だから、かける願いもわからず……だから、ルーラー適性がある……」

無機質に違反者を裁く機械として……

「……死体？」

「G……シグマタイプのアマゾンのベースは人間の死体なんだ。」

「……酷い。」

こんな……こんなこと命への冒瀆に他ならない。安らかに眠るべき死人の尊厳を踏みにじり、異形へと変えて感情までも兵器には不要と奪う。Gは見知らぬ傲慢な存在に怒りを覚える……が、そんな若き青年に死体は問う。

「酷い？お前に言えるのか……同じ死者を従えるお前が……？」

「……」

死者……即ち、サーヴァントのことか。確かにそうかもしれない……英霊とは死んだ英雄が世界に祀りあげられた魂で、これを召喚術にて分霊させ受肉させたものがサーヴァント。ある意味、墓穴を掘り返すよ

うな行いとしては同じなのか……………

「されど、『それは違いますわ!』と声をあげたのは清姫だった。

「私たちは確かに既に本来ならこの世にはいない存在ですが、しっかりと『願い』があります!ただ、動く死体では無いのです!!例え、一時の夢でも生きている…:そんな私たちに寄り添ってくれるからマスターと一緒に戦っているのですよ。」

「清姫…」

彼女は否定する…:自分たちは道具ではないし、自分の従うマスターは無情な冷血な人間でもない。

すると、シグマはそうか……………と立ち上がろうとするのを止め、膝をついた。

「ああ…:俺には解らない。それが、サーヴァントだというのなら……………俺は……………何の……………ために……………」

「もう良いよ。もう苦しまなくていい……………ゆっくりと眠れ。」

再び、オメガはアームカッターを展開した。今度は敵を倒すための必殺技ではなく、処刑でもなく、まだ死体に縛られる魂を解放するための介錯であった。

次の瞬間、ヒュンツと刃が空を裂き…:異形の首が宙を舞って地面に落ちた。これに呼応するようにシグマの肉体は完全に溶解し…:そのまま、光の粒子となって消えていった。

【特異点反応、消失しました。マスター…:悠さん、清姫さん、帰還の準備を。】

マシユのオペレーションが此度の異変の終わりを告げる。丁度、そこに『『無事かマスター!?!』』とダブルオルタちゃんを駆けつけて探索はピリオドとなり…:Gたちはカルデアへと戻っていった。

★☆☆☆☆

「……………と、まあ…:これが今回の一部始終だ。」

そして、今回の探索をどういうわけか食堂にてドヤ顔で語るセイバーオルタ。あれ？何かしてたつけ？とか言っではいけないとエミヤとマシユは微妙な顔をして彼女を眺めている。

「…だからな、あの蜥蜴（悠）の進化には必要な試練だとあえて身を引いて様子を見ていたのだ。な？だからな……頼むからこの消毒液くさい御飯はやめ…っ」

「つべこべ言わず食いなさい！」

「ふべらっ!?!」

そして、涙目で懇願した彼女はナイチンゲールにより消毒液に満たされたフルコースディナーに顔面をぶちこまれた。此度、独断行動かつ全く役に立たなかつたこのオルタちゃんにマスターが言い渡したのは3食ナイチンゲール飯1週間の刑である。勿論、当然の報いといえはその通りなのだが……

ここに、無慈悲に清姫が追いつちをかける。

「旦那様、この不届き者は嘘をついていますわ！」

「宜しい、もう3日プラスだ。」

「ツ!?! この人でなし……ッ!!?!? お前に人の心は無いのか!!」

これには我等がおかんエミヤも『自業自得と思いたまえ。』と切り捨て、暫くこのオルタちゃんがナイチンゲール飯に血の涙を流す日々が続いた。一方……

「さあ、ジャンヌオルタ…もう逃げられませんかよ。」

「大人しく、罰を受け入れなさい。」

もう1人のオルタちゃんこと、ジャンヌオルタは目が妖しく光る天草四郎とオリジナルであるジャンヌ・ダルクに壁際に追い詰められていた。『ひいいい……』と怯えるジャンヌオルタの目線の先には天草が握る謎の小瓶に入った液体状の薬品。知っている……これを飲んだら自分はどうなるか……ジャンヌオルタは知っている…。

「ハア…ハア……（狂気）」

「来 ない で … 来 ない … デッ テ、言ッ てる
のオー……ッ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

!!!!!!!!!!!!

聖人なはずなのに、完全にキャスターのジルのような眼光の2人。明らかに犯罪的な変態の詰め寄り方をする聖人たちに最期、ジャンヌオルタの断末魔がカルデア中に響く。そのあと、季節外れのクリスマス。のサーヴァントが現れたのはまた別の話。

これが通称・サンタリリーの刑である。このあと、録画されて元に戻った本人の前で観賞するという二段構えというジャンヌオルタ特攻の恐ろしい刑(笑)だ。

……さてさて、真面目な所に戻るとしよう。

悠はダ・ヴィンチちゃんと話をしていた。今回、自分のニューオメガへの進化とオリジンとの関連性…そして、今回の探索の一部始終に彼女はフムフムと頷くと天才なりに考えた結論を出した。

「悠くん、やはり察するに今回の特異点の発生は君のクラスチェンジが原因ではないかと私は思うんだ。」

「クラスチェンジ…ですか？」

「そうさ。君は元々バーサーカーだったのをカルデアに召喚されるにあたってアサシンにクラスチェンジした。その時、無意識に人喰い(アマゾン)の部分が強引に切り離してしまったんではないかな？本来、クラスチェンジなんて芸当はそう簡単には出来るもんじゃない…それなりの代償を伴うものさ。結果、君の欠けた霊基は不安定になり食人衝動がそれを補うために強くなった…皮肉なことにカルデアで迷惑をかけないようにした行為が裏目に出たわけじゃないかな。」

成る程、頷く悠。確かにバーサーカーで召喚されるのはカルデア側にも危険だと感じていたし、欠けた霊基を補強しようとしていたなら生者の時より強い食人衝動に説明がつく。

「…で、切り離された君の霊基を核に擬似特異点が発生した。そして、失われた部分を補填したことで君は本来の力を取り戻した…って所かな？実際、似たような事例は以前より報告されてるしね。」

最終的に独立した霊基の欠片…本能へオリジンを倒し吸収したことでニューオメガへと霊基再臨できたという結論。確かに、筋は通っ

ている。

でも……

(シグマ……アイツは何で現れたんだ?)

残る疑問。それなら、どうしてシグマが現れたのか?コウモリアマゾンやクモアマゾンはオリジンに反応して発生したと考えられるがシグマは明確に悠やカルデアのメンバーに敵意を持って立ち塞がった。本人は抑止力と言っていたが、それを聞いていたエミヤは考えにくいと言っていた。たかが、サーヴァント1騎でオメガ程度の力で働くものではないと……

(仁さん……千翼……)

過る元の世界の仮面ライダーたちに戦いを共にした仲間。彼等は無事なのだろうか……

何だか嫌な予感がする。自分がカルデアにいるのは本当にGと結んだ風都での縁だけなのだろうか……

(……それでも)

この身がサーヴァントなら……信じてくれるマスターがいるなら……帰れる場所があるなら……

別れの刻が来るまで戦おう。彼と彼の仲間たちのためにこの狂暴な力を牙とし、刃とし……

(仁さん、甘いって言うかもしれないけど……これが今の『線引き』です。)

…水澤悠Ⅱオメガ改め、仮面ライダーアマゾン・ニューオメガのカルデアにての戦いはまだまだつづく。

へ仮面ライダーアマゾン・オメガ編 DELINEATION E

ND
<<

イメージ
DIE
SET
DOWN
『

profile：水澤悠Ⅱ仮面ライダーアマゾン・オメガ（ニユーオメガ）

★仮面ライダーアマゾン・オメガ（ニユーオメガ）

クラス：暗殺者（Assassin）

属性：悪

魔力：E

耐久：A+

筋力：B+

敏捷：B+

騎乗：C

幸運：B

出典：『都市伝説』『仮面ライダーアマゾンズ』

宝具（オメガ時）：バイオレントパニッシュ（Quick）

宝具（ニユーオメガ時）：アマゾンパニッシュ（Quick）

カード構成：Arts×1 Quick×2 Buster×3

・スキル

『食人衝動E+（Busterカードの性能3%アップ。回復バブ効果確率でアップ）』……アマゾン怪人が持つ本能が具現化したスキル。この程度なら制御されている状態だが魔力供給を怠れば一気にEXまでランクアップし事実上狂化と同じになる危険性があるため注意が必要。

『騎乗C』……仮面ライダー補正がかかってアサシンにしてはそれなりのスキル。ジャングレイダーが専用マシン。

『気配遮断C』……アサシンにしてはかなり低めの値。元々がバーサーカーだから仕方ない。人間の姿でなくては効果を発揮しない。

戦闘スキル

『変化A（攻撃力アップ＋防御力アップ）』……アマゾン細胞による恩恵で細胞を様々な形質に変化できる。

『戦闘続行C（ガッツ）』……腹が空くほどでなくてはアマゾン細胞の与える生命力で止まることはない。

『第3のアマゾンEX（HP回復＋NPチャージ＋宝具威力アップ）』……オメガの固有スキル。アマゾン怪人の更に上位の存在として体現したスキル。

profile. I……水澤悠、彼は文字通り育ての親に半ば隔離されるように飼われていた。最初、彼は何の疑問も思わなかったがそんな彼に転機が訪れる。

profile. II……自らの本能の声に導かれ、鷹山仁Ⅱ仮面ライダーアマゾン・アルファの戦いを目撃しアマゾンとして覚醒する。やがて、自分は人喰いの怪物かそれとも人間なのか答を得るために対アマゾン怪人チーム駆除班と共に戦いはじめる。

profile. III……彼は仮面ライダーとされるが、必ずしも人間の味方とは限らない。もし、彼の『線引き』を越えたなら、末路を覚悟すべきだろう。

profile. IV……宝具『アマゾンズドライバー』『ネオアマゾンズドライバー』。オメガの力を制御するために必要な変身ツール。無くてもオメガオリジンとして戦えるが事実上、理性無きバーサーカーとなるためやめたほうが良い。

profile. V……カルデアに本来、彼が守ろうとした者はいない。でも、マスターが彼を信じるなら怪物は仮面ライダーとして共にあるだろう。人の歴史が完全に復元されるその時まで。

マイルームボイス

絆1……悠「あまり僕に近寄らないほうが良いよ。」

絆2……悠「僕は必ずしも人間の味方とは限らない。マスター、君

が僕の『線引き』を越えるなら……」

絆3……悠「…戦鬪かい、マスター？」

絆4……悠「マスター、あんまり気を許したら駄目だよ。」

絆5……悠「僕が仮面ライダーなんて…そんな資格があるとは思えないけど、信じてくれるなら力の限り僕は戦うよ。」

好きなもの……悠「好きなもの…昔は水槽で魚の世話をしてたよ。」

嫌いなもの……悠「嫌いなもの…自分のエゴで命を弄ぶ奴は絶対に許せない。」

聖杯にかける願い……悠「聖杯か…そんなものはアテにしない。大きな力にはきつと、大きな代償が伴うから。」

マシユについて……悠「僕と彼女が似ている…わけないか。あの娘は人の未来のために産み出されたんだから、僕とはちつとも似てない。」

鷹山仁Ⅱ仮面ライダーアマゾン・アルファについて……悠「仁さん…ある意味、僕の師匠と言える人。結局、相容れなかったけど…こうして戦えるのは嬉しいよ。」

千翼Ⅱ仮面ライダーアマゾン・ネオについて……悠「マスター…彼は危険だ。いざとなったら、容赦はするな。この世界の人間のためにも。」

アマゾンライダー（昭和）について……悠「アマゾン？…ん？アマゾンじゃない……でも、何でだろう…奇妙な縁を感じる。」

エルドラドのバーサーカーとアマゾネスについて……悠「いや、多分関係ないよ？マスター？そんな目で見ても僕から羽なんて出ないから！」

仮面ライダーゲム編

仮面ライダーゲム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）

カルデア マイルーム

「仮面ライダーアマゾンズ season 2 完結おめでとうございます
悠さん。」

「ああ、ありがとうマシユ。それに、マスターも…」

「お疲れ様、悠。」

カルデアではない本来の悠…仮面ライダーアマゾン・オメガの物語
が一区切りがつき、それを祝うGとマシユ。結末はとても明るいとは
言えず血生臭いものだったが、またこの先も物語は続いていくのでま
た時が来たら見届けよう。取り敢えず、今だけでも落ち着いて少しで
も彼が幸せを感じられたなら支える側としても嬉しい。

「仁さんと千翼もいれば良かったんだけど…やっぱり、サーヴァント
になるのは抵抗あるのかな。」

因みに、もうふたりのアマゾンズライダーは元よりカルデアに召喚
されていない…

シグマ？知らない子ですねぇ…

「やはり、元の世界の仲間…というのは恋しいですか？」

「そうだね。特に仁さんはここに来てもらいたかった。あの人はずつ
と、ボロボロで苦しんでばかりだったから。（千翼はアヴェンジャー
適性とか得てなきや良いんだけど…）」

仁さん…仮面ライダーアマゾン・アルファは悠の生き方において重
要な役割を担った存在であり、アマゾンズという物語で最も傷ついた
人間であろう。恐らく、彼はボロ雑巾のような身体を引きずりながら
今も元の世界をさ迷っているはず…そう思うといたたまれないと悠
はずっと考えていた。せめて、このカルデアでサーヴァントになれば

一時の夢でも痛みを和らげることぐらいはと…思わずにはいられない。

「大丈夫、信じていけばいつか会えるかもしれないし?」

「…うん、そうだね。」

でも、カルデアの旅もまだまだ続くのだ。亜種特異点の発生やそれに連なるものは止む様子は無いし、希望的観測だが会える可能性だつてあるのだ。Gの言葉に励まされ、頷き…『さあ、ケーキを切りましょう』とマシユが用意したホールケーキにナイフを入れる。

そして、

「随分と楽しそうじゃないかGイ…?ゲームマスターの私を差し置いてッ!!!」

「…」

突然、現れた社長（変身済み・レベルX）が全てを台無しにした。Gとマシユは白眼を剥き、悠は戸惑ってしまう…ちよつと待って何

なのこの人？

「そのこの奴の絆クエストは前回終わっただろう！この私の絆クエスト放置ばかりか、育成まで放置するとはどういうつもりだアア!!？」

「あ、あの……」

「悠さん、ご紹介します……この間、召喚されました仮面ライダーゲームこと檀黎……『新』檀黎斗だッ!』……新・檀黎斗さんです……はい。貴利矢さんと同じ世界のライダーだそうですよ。」

仮面ライダーゲーム……新・檀黎斗こと自称・神。貴利矢曰く、自分たちの世界のダークライダー。自称じゃないプロフィールとしては幻夢コーポレーションというゲーム会社の社長であり、貴利矢の使用ゲームアドバイザーやガシャットなどを開発した張本人にである。性格は自分最高主義、俗にいう自分の才能に酔っている奴でその才能を十二分に活かしているのだから質の悪い。(酔い過ぎるがあまり足許をすくわれたりしているのだが……)

カルデアに呼んでもないのに来た。しかも、『神を召喚するには相應の供物が必要』とのことでGが数ヶ月フリクエとか配布やらでちよくちよく貯めていた貯金を勝手に全てを食い潰して。これには☆5サーヴァントの方々もびっくりでありのシヨックに発作を起こしたGは集中治療室でナイチンゲールの治療を受ける羽目になった。この件について全く、ゲームは謝りも反省していない……

「……で、何か用?」

まあまあ、今更過ぎたことは気にしない。用があるからわざわざ来たんだろう……実際、経営者兼技術者の彼が現在の人手不足のカルデアに貢献しているのは事実。あまり邪険にして拗ねられても面倒だ。「フフ、G……この夏には仮面ライダーエグゼイドの劇場版が控えている。それに、際してこのカルデアにおいて壮大なイベントを催すことにした……まさに、『神』による『神』のための『神』イベント……その名もツ!!」

「……その名も?」

狂うとかあるのかね仮面ライダーは…

「ものわかりが良いのは良いことだ。さあ、夏の新・檀黎斗祭り…開幕だアアアアアアアア!!!」

……バグヴァイザーII、無かったかな。

★☆☆☆☆

レイシフト……行き着いた先は雪原地帯。これといって、市街地には何か特別な様子は無さそうだ。

【先輩、そちらはどうですか?】

「こっちは平気。そっちは?」

【はい。ダ・ヴィンチちゃんが用意を進めてくれています。】

こっそりと作業を裏方に依頼し、挑む新・檀黎斗祭り。一体なにがはじまるかと謎のゾンビダンスをするゲンムを見ていると……

「最初の出し物はこれだ…ッ! 『デンジャラスクリスマス!!仮面ライダーレーザーは何度も死ぬッ!!』」

そして、やってきたのは『解せぬ。』と首を傾げた仮面ライダーレーザーターボ。おまけに、アルトリアサンタオルタまで……

いや、サンタオルタは良いとして良心の塊のようなレーザーターボまで何故……

「貴利矢ん……」

「いやっ、この役回り嫌ですよ自分。こんなの当て付けでしかないですし……でも、その怖いサンタさんに脅されて……」

……で、サンタオルタの言い分は何なのだろう。

「ふむ、マスター……この場に私がいることは意外だと思っているだろう。無論、ちゃんとした理由がある。私はこの男と決着をつけねば

ならん理由が……」

随分と神妙な顔をしているが、ゲムは仮面の下で笑っているのが窺える。まさか、この恐ろしいブラックサンタに何かしたのか……？一応、ブリテンの王の彼女に……

「……社長？（恐る恐る）」

「いいや、私は彼女に何もしていない。ただ、あえて言うなら彼女と私は相容れなかったということだ。まあ、逆怨みもいいところだな。」

「そう……コイツがいる限り、私の存在は脅かされるのだ!!」

「……回想入ります。」

★☆☆☆☆

「サンタオルタの回想……カルデアの子供組サーヴァント部屋。」

「むっ、夜更かしをしている悪い子の気配がしたので来てみれば……」

と、訪れたサンタオルタ前にはいつもの仲良し子供トリオ……ナーサリーにジャックとサンタオルタ後輩であるジャンヌサンタオルタリイ。1人だけマジなげえ……

面子としてはさほど珍しくはない、仲良くテレビゲームをやっているだけだ。ただ、眼があるべきところにはバイザーを箱形にしたような珍妙なる機械をつけているのがとてもサンタオルタには不気味に見えた。

「な、何なのだ……そのつけているものは……最新の洗脳するマシンか何かか？」

「あーその声は先代ですね!!これは『VR』と呼ばれるモノでこれがかけるとゲームに入ったように見えるんですよ！新・檀黎斗さんに貰ったんです。」

「……ほう。」

になった……

そして、サンタオルタの株は子供たちから大暴落して、また新しいゲームを与えた新・檀黎斗の株が上がることになる。

★☆☆☆☆

「おk?」

「OK (ズドン)」

Gの半ギレのガンドがレーザーターボに当たった。スタンした彼がビクンビクンしてるが、スルーされる。

「このままではサンタとしての沽券に関わる!ここは元凶である貴様を排除して、サンタの座を守り抜く!!」

【先輩!本当にどうしようもないほどの逆怨みです!?!】

呆れてるんだが、驚いてるんだがよくわからないマシユのナビゲーションを耳にGは頭を抱える。もう本当に自分は巻き込まないでほしい。頼むから他所でやってくれ。

「ふはははは!!なら、最初の死のデータは貴様らから採取してやる!いくぞ、マスター!ついでにカルデアのサンタの座も頂きだ!!」

……ああ、もう既に帰りたい。

【取り敢えず、死なないで下さい先輩!】

To be continued.

仮面ライダーゲーム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）く女神の目に涙編。く

……並行世界のカルデアのマスターの皆様、お元気ですか？マスターのGです。

恐らく、大半の方が復刻の水着イベントを楽しんでいることでしょう。俺もね、楽しみたかったよ復刻ツ!!気がついたら、夏のゲームサイコゾンビ祭りになってたんだよこん畜生ツ!?

「サンタからの贈り物だ…聖夜に沈め……!」

んで、何だつてクリスマス属性のサーヴァントに真夏に殺される寸前なんですか社長!?

「落ち着け、マスター!ここは仮面ライダーの伝統的な防御方法で凌ぎきるぞ!!」

「…と、言いつつお前なんで自分のこと掴んでやがるんだ……?」
パニックになりかけのGに対し、ゲームが起こしたアクションは未だスタン中のレーザーターボをひっ掴むこと。何をするつもりなのか……

「…モルガアアンツ!!!」

そして、サンタオルタが魔剣を振り抜くと同時に…

「ガードベントツ!!」

「後で覚えてろテメエエエエエエエエエエ!?!?」
文字通り、盾にした。まさに外道。

真つ暗な魔力の奔流にレーザーターボは吞まれて消えた。多分、霊基情報は残っているからカルデアに戻れば大丈夫だろうが…

無論、全体宝具をそれだけで耐えきれぬわけもなくふつとばされたゲムムだが…倒れて僅かな時間でゾンビダンスをしながら立ち上がる。

「ンンンツ…流石に今のは効いたぞオ？サンタとはいえ、流石は騎士王といったところか！」

ゲムムのデンジャラスゾンビゲーマーの力…『死』。不死ではない、既に死んでいるので殺しようが無いと言ったほうが正しい。現にゲムムのHPゲージは胸のソレもFGO的メタなゲージも0なのだが、サンタオルタは基本的にゲームはやらないため理解は出来ない。

「貴様、いくら身代わりを使っていたとはいえこうも平然と立ち上がるとは…まさに、ゾンビだな。だが、それも腰巻きについているアイテムのお陰だろうか？ならば、今度はそれごと破壊するまで！」

されど、彼女もカルデアに所属するサーヴァント…身内のことは全く無関心というわけでもない。ある程度の情報は本人なりに収集しており、仮面ライダーのサーヴァントの弱点は大半が変身ツールということは知っている。ましてや、相手はゾンビだろうと仮面ライダーで中身は一般人の人間。ならば、騎乗兵クラスだろうと仮にも騎士王…遅れなどとは無いが…

……勿論、普通に戦うならの話だが

「待て。それ以上、恥を上塗りする気かア…？」

「何？」

ピタリと動きを止める。そう、彼女は気がつくべきだった……相手は祭りの主催者(ゲムム)であり、自分はただの駒(ゲームキャラ)に過ぎないのだと。ゲームの開発者がわざわざ自分の作品でゲームオーバーするなんて阿保らしい結末などこの男がするわけも無く、この催し物は彼が参加する時点で出来レースならぬ出来ゲームなのだ。

「後ろを見るが良い!!」

「…ツ!?!」

ゲームが指差した先…そこには…

「…本当に、見損ないました先代。」

「なっ!?!何故、お前がここに!?!?!」

彼女の後継者であるジャンヌ（スパム略）リリイ。いつの間にいたのであろう…いや、サンタオルタにとって問題はそこではない。致命的なのは一部始終を見られてしまったであろうことだ。

「私たちのVRを炭にしたには飽きたらず、今度は八つ当たりなんて全くロジカルではありませんね!」

「ち、違うんだ!私はまだ…」

「言い訳は聴きたくありませんよ!新・檀黎斗さんのように子供に優しい人を傷つけるような貴女に最早、サンタの資格はありません。子供の希望を壊すような貴女からはサンタの資格を剥奪しますッ!」

「…や、…やめっ!?!ぐわああああああああああ!!私からサンタが抜けていくうう!!!!」

(サンタが抜けていくつて何だろう…)

ギルティ判定を受けるや身体から凄い勢いで魔力的なナニカが抜けていくサンタオルタ。するとゲームはすぐさま、ガシヤコンバクヴァイザーを外して彼女に突き立てると溢れ出るエネルギーを吸収していく。

「第1クエストクリアッ!!最初の死のデータは『ブ!ラッ!ツクサンタの死』!これは最初から高得点だぞ、ハハハハハハハハ!!!!」

大喜びのゲームに白眼を剥いてただのセイバ!山!オルタになってし

まった元サンタ。前者と共に喜ぶべきか後者を哀れむべきかGには分からない：ただ、ジャンヌオルタリイは何処から現れたのだろう……さつきまで確かに気配は無かったはず。

その種明かしもちゃんど、社長がしてくれる。

「よし、実にご苦勞だったぞ。変装を解け、アレキサンダー。」

「はいはい！」

「へ？」

指示を受けるや、サンタ少女の姿はボヤけて消え…代わりに赤毛の美少年が現れた。Gとマシユは啞然とする……まさか、こんな奇妙な祭りに協力するとは思えない人物だった。制服王イスカンドルのまだ幼き姿でありながらも王者としての風格を持つサーヴァント『アレキサンダー』：加えて後ろにはタキシードを着こなす孔明ことロード・エルメロイⅡ世の姿（大人）もある。この組み合わせはカルデアではよく見掛けるがやはり、ゲンムに協力するとは考え辛い。

「マスター、びっくりした？変装は先生がやってくれたんだけど声真似は僕がやったんだ。自分でもこんなにクオリティ高いなんてびっくりだよ本当。」

「……（坂本●綾が成長すると、大塚●夫になる……）」

【先輩、今なんか変なこと言いませんでした？】

Gが謎の電波を拾っているが気にしてはいけない。

一方、孔明は真剣な顔でゲンムに向き合おうと手を出した…

「では、約束の物を受け取ろう。」

「ああ、わかっている。」

ゲンムが渡したのはガシャットギアデュアルβ。タドルファンタジーとバンバンシユミレーシヨンの2つのゲームが内包しているアイテムだが、これはあくまで玩具である。それと、2つのVRを渡すや孔明は静かに口角を上げる。

「確かに受け取った。では、我々はこれで…。」

「やったあ！先生、今夜は先にどっちからやる!?やっぱりタドルファンタジー？でも、バンバンシユミレーシヨンも捨てがたいなあ…。」

ああ、そういうことなのか。あのコンビはカルデアきつてのゲー

マーである：正確には孔明が憑いた人のせいであるが、これを利用して新しいゲームで買収したのだ。流石、ゲーム会社の社長らしい策略だと呆れながらも感心してしまうGとマシユ。

「異世界とはいえ、私のゲームのファンが増えるのは嬉しいことだな。」

ゲムもゲムで満更ではない。フフンツと彼等を見送りながら満足げに鼻を鳴らし：これに機嫌をよくした彼は高らかに告げる！

「さあ、新・檀黎斗祭り：次のステージへ向かうぞオオ
!!!!!!!」

★☆ ★☆ ★☆ ★☆

レイシフト……目標地点 バビロニア

現在地 地底・冥界

「待っていたのだけ、G！」

「……」

待っていたのは自称ではなく本物の神様、金髪のツインテに何故かビキニ水着の我等が冥界女神『エレシユキガル』である。到着するや、何故かノリノリで出迎えてくれた彼女なのだが……

「社長、純情なエレちゃんに何を吹き込んだんです？」

「濡れ衣だ。普通に『デンジャラスツアー！バビロニア冥界巡り!!』をやるとしかメールしていない。」

うん、さっぱりわからん。

取り敢えず、女神様から話を聴いてみよう。

「わかっているわよ！今、カルデアは復刻水着イベント中でピック

アップで私がとうとう実装されるんでしょう!!ウッフ、だからちよつと奮発してちよつと刺激的な水着を買ってみたの……どう、似合う?」

「凄く…(エロ)可愛いです。」

日曜朝8時にはだいたい目の毒なくらいセクシー…流石、女神様。とはいえ、どういうわけかとんでもない勘違いをしているらしい。どうしたものか……と考えるまでもなく、恥じらい赤らめる顔から弾ける笑顔を輝かせてGに手を拡げるエレシユキガル。

「それじゃあ、G!はやく私を南国のトロピカルなアイランドに連れていって頂戴!!フレッシュでいちご味な夏休みが私たちを待っているんだわ!」

「…」

本当にそうだったらどれだけ良いだろう。確かに、そうだったら並行世界のマスターたちも大喜び間違いなしだし、まあ夏休みくらいだったら彼女に与えてあげても良いような気がする。本当に希望に満ちる純情な笑顔がとてつもなく罪悪感を感じるのだが、残念ながら慈悲など無い社長は残酷な真実を突きつける。

「おい、駄女神…貴様、ちゃんとメールは見たか?」

「誰が駄女神かつ!?ええ、ちゃんと来てたわよ…イベントやるってカルデアから……」

「…ちゃんと中身は読んだか?」

「……………中身?」

あ…(察し)。そそくさこの時代に無いはずのスマホを取り出してメールボックスを確認するエレシユキガルから目を背けたG。これより真実を知った冥界女神の表情をご覧ください。

「！（真実知った衝撃の顔）」

「…（絶望して死んだ魚の眼になる顔）」

「……（今の自分が急に恥ずかしくなる真っ赤な顔）」

「……………（ぷるぷるぷるぷる）」

エレちゃん？恐る恐る話しかけるG…そして、

「騙したなッ
!!!!!!」

「言い掛かりだっ!!?」

駄女神様は逆ギレし、Gとゲンムのリアクションがハモる。完全に
向こうに非があるのに怒りを露に涙目で訴えてくる！

……………可愛ry（そんなことを言っている場合ではない。

「こうなったら、ただでは帰さないわ!!冥界の女神を怒らせたことを

後悔なさい！」

「マスター、女神エレシユキガル…サーヴァント召喚!!こちらとの戦闘体勢に入ります！」

「面白い！神対神と洒落こもうじやないか…！いくぞ、G!!」

……………本当にとんだ祭りであると心の中でぼやくGであった。

To be continued…

仮面ライダーゲム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）く地獄
から来たDEAD MANSく 前編

…………ガッツ!!ガンンツツ!!!

「…ぐっ!?!」

先のサンタオルタ戦に続き、新たなサーヴァントに苦戦を強いられるゲム。エレシユキガル、彼女が召喚したのは…………

「…………貴様はあと4手で仕留める。（死体に労基なんて無えってハッキリわかんだね!畜生ツ!!）」

仮面ライダーアマゾン・シグマ。ゲムとは違い、正真正銘の動く死体のゾンビライダーである…………え?前回のオメガにも出た?シグマタイプに人権は無いつて並行世界のドクター真木も言ってたもん!つまり、慈悲は無い。

一方のエレシユキガルちゃんはどうと…………

「やっぱり、ここでこの格好は流石に寒いのだわ!へっ…………へっちっ!!」

冥界で水着なんて格好をするあまり寒がる冥界の女神。戦闘どころか、隅っこでちーつと鼻をティッシュでかんでいる。

…………可愛ry（そんなことを言っている場合ではない。

「ええい、腐敗臭が移る!」

【ガシヤコンスパロー!!】

徐々に圧されているゲムは機械弓ガシヤコンスパローでエネルギー矢を放ちまくるが、全弾命中するもお構い無しに前進して首根っこをひっ掴んで投げ飛ばすシグマ。流石、本物の歩く死体(ゾンビ)なだけに戦い方も普通のライダーとは違う。しかし、やられてばかりの社長ではない。

「私に触れるな！」

【デンジャラスゾンビイ!!クリティカルデッド!!】

「ッ！」

バクヴァイザーのボタンを押して発動する切札。同時にゲムムの幻影が無数に邪悪な霧と共に現れ、ゾンビ映画さながらにシグマを取り囲みまわりつき：アマゾンズドライバーに腐食が起こる。今こそ好機ッ！立ち上がるゲムムはガシャコンスパローにデンジャラスゾンビガシャットをスロットし、分離させるとそれぞれ鎌形態にして身構えた！

【デンジャラスギリギリッ・フィニッシュ!!】

「…ハアアッ！」

ー斬ッ!!!

まさに、空を舞う死神の鎌だろう。ゾンビ軍団ごとX字に斬り裂き、シグマはドス黒い体液を吹き出しながら倒れ伏した。

ゾンビ対ゾンビ：文字通りの死闘を制したゲムム。勝利者は高らかに笑う。

「ハハハハハハハハ!!たかが死体ごときがッ！この神にッ!!勝てるとでも思ったかア!!」

「…(面倒くさい。)」

「って、あーッ!?ちよつと目を離れた隙になに負けてるのー!?てか、まだ戦えるでしょアンタ!!お願いだから戦いなさいよ!きつと、このままだとあの山の翁がやってきて『働け。』ってオチになるに決まってるのだから!?嫌よ、私は絶対に水着南国夏休みを諦めないんだからくー!」

そして、シグマは哀れな駄女神を見捨てた。Gとしても、どうにか救いの手を差し伸べてあげたいのは山々だがこればかりはどうしようも無い。加えて……………

「働け。」

「ひいひいひい?!?!? やっぱり、でたー！ー！ツツ!!!?」

「ご期待にお応えしてと現れたキンググハサンこと山の翁。グラランドクラスに適正があるだけに存在感も実力もそこらのサーヴァントを凌駕する死神の鎧武者。エレシユキガルは以前、彼にチョンパされたことがあるので以来、苦手よりかは天敵に近い。その姿を見るや、目にも止まらぬ速さでGの後ろに隠れて小動物のようにふるふるると小刻みに震えている……………」

……………可愛ry（後輩が通信越しに睨んでいる

「久しいな、カルデアのマスター。」

「お久しぶりです。あんまりエレシユキガルちゃんをいじめないであげて下さい。」

「ほう?これが噂にきく山の翁…グラランドに値する霊基を持つアサシンか。」

挨拶を済ませるG。あと、社長…あんまり失礼だと冥界女神もフアラオも逃れられなかった首チョンパされちゃいますよ。

と、まあそんな危惧は杞憂でゲナムを無視してGと会話をする。

「失敬な。我はあくまで警告しにきたに過ぎぬ…カルデアのマスターよ、早くここを立ち去るのだ。災厄と怨念の化身がここに近づいてきておる。」

なにそれ?社長も『私もそんなもの用意した記憶が無い。』と首を傾げている。ほぼこれとタイミングは同じだった……

「どいてどいてどいてええ!!」

「ん?…ぐはっ!」

「轢き逃げ案件!」

唐突に現れた金色の光にエレシユキガルが跳ねられた。何事かと思えば光の正体はエレシユキガルと同じ、バビロニアにてGと戦った女神『イシユタル』ではないか。エレシユキガルと同じ依り代かつ鏡面存在である故、しなやかな黒髪以外は瓜二つの彼女だが、妙に慌てているようだ。

「な、何なのよ一体……また勝手に冥界に……!」

「そんなことより、さっさと逃げるわよ……!てか、何その格好……?ん……?」

ふと、目線を逸らしたイシユタルはシグマに気がつく。すると、ジト目をしながらエレシユキガルに問う。

「あんたさ、まさか勝手にあの王様（ギルガメツシュ）の召喚魔法陣使った?」

「え?」

「…使ったの?」

「ええ、ちよつと借りてサーヴァント召喚を……」

「お前の仕業かア!!!」

「へ!?!」

どうやら、この駄女神はGたちの預り知らぬところでとんでもない

ことをやらかしたらしい。鬼の形相で彼女の肩を掴んで振るイシユタルから見るにかなり大事のようである。神様の不祥事とか考えたくもないのだが……

「我はこの件に関わる気はない…さらばだ。」

真つ先にエレシユキガルを見捨てたのは山の翁。本当にただ警告して帰っていったよあのアサシン…

「ええい、このお馬鹿！アホ!! 駄女神!! なんてことしてくれたのよ!? お陰でとんでもないのが来ちゃったじゃない!」

「痛い! 痛い! 痛いのだわっ!?!」

(目くそ鼻くそを罵る……)

「G、私も言えたことじゃないが、女性に失礼すぎじゃないか?」

イシユタルの罵りがもろにブーメランな気がするG。貴女、バビロニア魔獣戦線攻略で自分がどんな様か忘れたんですかね…? というか、仮にも女神がとんでもないとかサラツと言ってる時点でもうビーストとか来ても不思議じゃない。

「はッ!? うわアーーーーー!?!?」
「アーーーーー!?!?」

数秒後、現れた時のように猛スピードで去っていったイシユタル。よって、解放されたエレシユキガルは地面に投げだされ…けほつと咳をする。

「…もう、一体なんだっていうのよ?」

『あら〜?…ここにはパツ金の姉さんもいるんですね…?』

直後、エレシユキガルは『ヒョオオオオ』と声にならない奇怪な悲鳴をあげた。正確には依り代側の少女の側面が…だが…

『確かこっちはエレシユキガルさんでしたっけ？本当、おかしい…なんで姉さんばかり女神をふたりもかけもちしてるんです？』

黒い…黒い…何処までも黒い少女。赤い瞳に銀の髪は美しく妖しく禍々しく…『彼女』はエレシユキガルを姉と呼び不気味にせせら笑う。嘔き出す邪悪な魔力は恐らく、ビーストに連なるこの世全ての悪へアンリ・マユからくるもの。それでも、まだ人間の姿で呼ぼうというなら『間桐桜』と名がある。

『私はね…ずっと、我慢してたんですよ？桜セイバーとか実装されても、アルトリアシリーズが無駄にぼこしゃか増えてもツ！水着イベントにお呼びがかからなくてもツ!!ジャガーマンとか出ても!!ずっと、ずっと、待ち続けたんですよ？なのに…挙げ句の果てにBBちゃんってなんですッ!? stay nightのヒロインをツ！第3の真ヒロインをツ!!なんだと思ってるんですか!?私への義理を通すなら、私↓BB↓桜セイバーでしょう!!順序が逆じゃありません?』

「わ、私に言われても困るのかわ!？」
（シン・ヒロイン…?）
（やめろ。）

あまりの恐怖的な迫力にあのゲナムすら小声である。桜…否、黒桜は口から怨念と呪いを垂れ流し…エレシユキガルにジリジリと迫る。このままでは、間違いなくただのデッドエンドより凄惨な末路が待っているのは間違いない。

「し、シグマ!!私を助けなさい!!」
「…（動かない。ただの死体のようだ。）」

早速、シグマに助けを求めたがとつくに彼は彼女をみかぎってやり過ぎすつもりだった。死体にすら裏切られる冥界の女神…

「そんなんっ!?!じ、G…お願い助け…」

ならば最後の頼みの綱であるカルデアのマスターは……

「ここは逃げるぞ、マスター！」

ゲラムの宝具、コンテニュー土管で離脱しようとしている真つ最中だった。

「え……………嘘でしょ、G？お願い、私を置いてかないで…………」

震えていた。まさか、世界を救ったマスターがこんな女の子を見捨てるわけがない。切なる女神の願いに対し、Gは答える。

「アイルビーバツク。(サムズアップ)」

ゲラムと共にコンテニュー土管に飛び込んで…

「うわあああああわあああああ
対に呪ってやるう！！！！！！」

！！！！！！！！

！！！！！！！！！！

『あらあら、可愛いそうな姉さん？じゃあ、私がたつぷり可愛がって
(八つ当たり) してあげますね。』

このあと、不気味な笑い声と駄女神の悲鳴が冥界中に響き渡った。

「はいはい〜、最後に桜ちゃんからカルデアのマスターさんたちにお知らせ。Fate／stay night heaven's feel第1章は2017年10月14日公開ですよ。見に来ない……………ウフフ…………」

★☆☆☆☆

テツテテ、テテ、テ〜♪

「ふうッ！」

「いでっ!？」

コンテニュー土管により何か特撮によくある採石場っぽい何処かにワープしたGとゲンム。勢いよく吐き出された彼等…Gは尻餅をつき、ゲンムはカツコよくヒーロー着地した。同時にマシユから通信が入る。

「……やつと繋がった！先輩、申し訳ありません…急に通信が途切れて……」

(エレシユキガルちゃんの尊い犠牲は忘れない。)

「……先輩?」

そう、エレシユキガルちゃんは犠牲になったのだ。

彼女の失われた純情な笑顔の記憶を噛み締めるG。そして、ゲンムはバクヴァイザーを確認する。

「まあ、多少のイレギュラーがあつたが無事に冥界の死のデータは蓄積された。ステージ2はこれでクリアだが……」

言葉の歯切れが悪い。彼がクイツと切り立った崖に視線を上げると同時にそこへ人影が現れた。黒い甲冑に龍の戦旗と邪剣を握り、こちらを見下す彼女は…

「待っていたわよ、マスター!!」

「オルタちゃん!」

「ジャンヌオルタよっ!?!オルタちゃん言うな!」

アヴェンジャー…ジャンヌオルタ。Gのサーヴァントであるが、わざわざ何の用だろうか?ゲンムの様子を見る限り、催し物のスタッフというわけではなさそうだし普通に現れない時点で何か企んでいるかもしれない。

「まあ、それは良いとして…。マスター、随分と楽しそうじゃない…私

を差し置いて?」

「私の台詞をパクるなア!!!」

「うるさいー!……っつ、調子狂うわね。気を取り直して、私がここに来たのはアンタとルーラーどもが持つてる私の黒歴史を全部処分させるためよ。」

黒歴史?はてさて何の事かわかりませんなア……と某・アラフィフの如くすっ惚けるG。すると、勘にさわったのか眉間にシワを寄せジャンヌオルタは怒鳴る!

「シラを切ろうたってそうはいかないわ!ジルが全部、吐いたの……アンタたちが小さくなった私をビデオに撮って録画してるってね!で、私が元に戻ってる間はそれを見てルーラーどもと楽しんでるって!!」
成る程、彼女はGとルーラーたちが持つであろうジャンヌ(スパム略)リリーのデータを抹消したいらしい。ジャンヌオルタからすれば、黒歴史そのものをまるごと納められている映像なんて存在が許せるわけもない。

されど、Gとてルーラーたちとテレビの前でジャンヌ(スパム略)リリーの姿と一緒に見ながらほっこりする日課を無くすわけにはいかないし、

「大体、事情はわかった。だが、エクストラクラスとはいえこの神イベントを止めることなど許されぬ!神の慈悲が限界を迎える前に立ち去るが良い!!」

……何より、この自称・神がイベントの妨害など許さない。本当、神性皆無のくせにカルデアの中で神を名乗るとはある種の図太い男である。そんな彼にジャンヌオルタはフンツと嗤う。

「あーら、自称・神様ア?あの忌々しいブラックサンタをぶちのめしたことは褒めてあげるけど……怒っているのは貴方だけではなくってよ?」

「何……?」

「そうだぜ、社長……マスター……?」

お、お前は!と、ありがちなリアクションをとるGが見たのはジャ

ンヌオルタの隣に立つレーザーターボ。しかも、様子がおかしい。

「貴利矢ん、おこなの？」

「マジおこ。社長は言うまでもないが、マスターもマスターでしれつと俺のこと見捨てやがって……お陰でアヴェンジャーにクラスチェンジしちゃったぜ。」

【霊基情報確認……本当だ!? 貴利矢さん、本気で怒ってますっ!! ジャンヌオルタさんはともかく、マスター、新・檀黎斗さんは今からでも貴利矢さんに謝って下さい!!】

「マシユ、俺は土下座のスフィアは持ってないんだ。」

「何故だ？ 私は何も謝るようなことはしていない。」

【ふざけてないではやくっ!!】

流石にこの展開は焦るマシユ。現状、Gに同行しているのはゲンムのみだ……。いくら、ゲンムが死なないサーヴァントでもジャンヌオルタはエクストラクラスの強力なサーヴァントであり、レーザーターボも仮面ライダーの名に恥じぬ実力者で今は彼女と同じアヴェンジャーなのだ。それなのに、このマスターとサーヴァントときたら逆に煽りだす始末……

最早、逃れようがなかった……。

「へえ？それが貴方たちの答ですか……？なら、こちらも取って置きのサーヴァントを用意した甲斐があるものです。恐れるが良い……あんなを倒すために地獄からピッタリのサーヴァントを呼んだわ……：さあ、出てきなさい！」

「……？」

パチンツ！とジャンヌオルタが指を鳴らすとGとゲンムの前にニョキツと生える2本のコンテニュー土管。『地獄直通』と書かれた貼り紙があり、そこから這い出してきたのは……

「祭りの場所はここかア……？」

「さあ、地獄を楽しもうぜ……カルデアのマスターさんよ？」

最強、最狂、最凶の3テンポが揃う最悪の仮面ライダー……否、悪の仮面系譜へダークライダーたち。

Gはやっと、理解した……

オルタちゃんは本気で自分たちを殺しにかかっている。

後半につづく

仮面ライダーゲム 夏の檀黎斗祭り（大嘘）と地獄
から来たDEAD MANSと 後編

「落ち着け……落ち着くんた、オルタちゃん。わかった、ここはひとつ冷静に話し合おうじゃないか？」

今回はかりは本当にヤバい面々に再交渉をジャンヌオルタに持ちかけるG。よりもよって、おふぎけのギャグパートでマジの地獄で封印されていたであろう悪逆の化身を呼び出すなんて空気を読まないにも程がある。彼等は敵だろうと味方だろうと何かの拍子で平気に殺しにかかるような連中だ。

「……イライラするんだよ……」

まず、『仮面ライダー王蛇』。クラスは見たところバーサーカー……

コブラを思わせる紫の仮面ライダー……。変身者は浅倉威、殺人や暴力といった重犯罪をイライラしたという理由から物心つく時から繰り返した狂人である。

ライダーとしての能力も龍騎系に属するためベントカードを使用した多岐にわたる戦術に彼自身の暴力の嵐のような戦闘スタイルからかなり危険なサーヴァントだ。

「久しぶりの外の空気だ……まあ、これから地獄と変わらなくなるが……？」

もう1人は『仮面ライダーエターナル』。こちらもバーサーカーだろうか？

白い3本角に∞を模した複眼の純白のボディに黒いマントと仮面ライダーダブル同様にシンプルなれど、胸部や随所にはガイアメモリをスロットするマキシマムスロットが装着されている。変身者は不死身の傭兵部隊NEVERのライダーである『大道克己』。王蛇に比べれば落ち着いているが、翔太郎曰くかつて風都を恐怖と混乱に陥れるだけではなく街の守護者の仮面ライダーをも追い詰めた狂気と実力の持ち主。こちら、ダークライダーの系譜に恥じぬ者なのだ。

そんな彼等をよくわからけど取り敢えず、強そうとかつていうノリでジャンヌオルタは地獄から解放してしまったのだろう。加え、怒りでアヴェンジャー化したレーザーターボも含めると4体1である。見るからに、不利だ……されど…

「クククツ…」

ゲムムは……新・檀黎斗は笑う……

「ハハハハアア!!?何を呼んだかと思えば、その程度かジャンヌオルタ!!地獄の囚人を引き連れてたところで無駄ツ!この神である私に勝てるものかア!!!九条貴利矢もろとも、神の前に立ったことを後悔するが良いイイ!!!」

神は咎人を裁くもの、神に届く罪人などいるはずが無いと彼は自らの勝利を疑わない。いや、これがまっとうな戦いとすら感じていないのだろう…

そのあまりの傲慢さに溜息をつくジャンヌオルタ。

「はあ…私が言うのもおかしいけど、いつペン聖女さまか鉄拳女に説法でもしてもらったら?まあ、神様なんてカルデアに割りというけど録なのいないし……」

カルデアではではなく、型月にまともな神様なんてまずいないだろう。因みに仮面ライダーにも神様なんてろくなやつがいた試しが無い。しかも、割りと理不尽な理由で人類を滅ぼしにかかってくるとかザラである。ん……??

<コウタサンヲワルクイウナー!!

<ミツザネエ!!

「…なんか今、変なの聞こえたんだけど?」

もしかしたら、神様の声かもしれない…Gもとうとう聖人になってしまったのか。仮面ライダーの聖人………妖怪ボタンむしり75

3315DETE.

「いくぞ、G…こんな犯罪者ごとき、私の敵ではない!!」

【ガシヤコンソード!】

「…ハッ」

【SWORD VENT】

ああ、もうやつぱりこうなった。

ゲムムは黒いガシヤットを起動させてゲームのコントローラと剣が一体になったような武装ガシヤコンソードを構え、王蛇も蛇の尾のようなベノサーベルを召喚し、両者は激しい剣の打ち合いをはじめ

る。

「いいねえ……久しぶりだア、俺をもっと楽しませろ！」

「…ぐっ!？」

乱れる刃の中、王蛇は笑い…頭突きを繰り出す。これを顔面に受けたゲムムはよろよろと後退りし、追い討ちにとレーザーターボが迫るッ！

「はああッー！」

「おおっと、そうはいかないぞ?。」

しかし、寸前で彼の腕は掴まれ手が届くことはなかった。

レーザーターボが狙ったのは自分の変身ツールであるLv.0ガシヤットによるゲムムの弱体化。されど、元々それを作ったのは開発者である黎斗だ…そこまで彼はアホじゃない。が、こちらもレーザーターボとしても承知の上……

「…喰らえッー！」

「ぬっ!？」

突然のレーザーターボを巻き込むほどの炎の津波！ジャンヌオルタの放つ業火だ…!! 贗作なれど竜の魔女を焼き、その憎悪と憤怒の灼熱は死を司るゲムムとてかなりのダメージを与えるもので、骸と骨のような装甲を焼いていく。まずいっ…と感じたゲムムはガシヤットソードに先と同様の黒いガシヤットを装填した。

【タドルクリティカルフィニッシュ!!】

「ハッ!!」

そのまま、刃を振り抜き放つ絶対零度の旋風を起こして振り伏せる

ように炎を相殺してみせる。彼が使用したのはプロトタドルクエストガシャット……武器の召喚は勿論、通常のカシャットとは桁違いの力を出すことが出来る代物。

「倍返しだ。」

【タドルクリティカルフィニッシュ!!】

加え、タドル系ガシャットの性能として炎と氷の力を操れるのだ。今度は自分がやり返さんと黒炎を刃に燃やすゲンム……その前にエターナルが立ちはだかり、自らの獲物のナイフのエターナルエッジにガイアメモリをスロットし、迎えうつ!!

【エターナル！マキシマムドライブ!!】

「はああつ!!」

放たれる2つのぶつかりあう斬撃の三日月。どちらも同じ威力で拮抗するかに思えたが、一瞬でゲンムの攻撃が掻き消え彼は直撃を受けて近くの岩に叩きつけられた。まあ、結局は強力な攻撃を受けても当たり前のようにゾンビダンスしながら立ち上がるのだが……胸には今の攻撃でついたであろう傷痕が不気味に熱と蒸気を帯びている。この様子にGは違和感を感じ警告をする!

「黎斗!!何かおかしい、気をつけろ!」

「黙れ!神に指図をするなア!!」

そう、あの技が相殺でも何でもなくゲンムに当たった時から嫌な予感がしていたのだが本人は聞く耳などあらず。再び、ガシャコンソールドを構えようとするが……

「……何?」

握った剣は装填されていたガシャットを残して消えてしまう。それだけではない、ゲンム自身にも激痛と電撃が走りその場へ膝をついてしまう。

そんな彼を見てエターナルは不敵に笑った。

「残念ながら、無力化の能力を持つのは1人だけじゃない。ライダーシステムが違えば……まあ、少し時間がかかるようだがエターナルメモリの力も効くようだな?」

「……ア!?……がつ!？」

仮面ライダーエターナルの力：エターナルレクイエムは自らと同じガイアメモリを扱う者を無力化できるとうもの。しかし、今回はゲナムに直接エネルギーを送りこんだことでシステムは違えど機能不全を起すことが出来たようだ。

「馬鹿な!?あり得ない…っ!!そんなこと……!」

「お前はもう不死じゃない。さあ、地獄を楽しみな。」

直後、エターナルに蹴飛ばされてゴロゴロと転がり…そこを王蛇がマウントしリンチがはじまる。ベノサーベルを何度も…叩きつけられ、装甲に亀裂が走り…とうとう殴りとばされた拍子に変身が解除されてしまう。

「嫌だあ!!嫌だあ!!死にたくない…!!死にたくない…!!」

神と自身を語った男のなんと情けない姿か。ボロボロになり、四つん這いでなんとか逃げようとするもご機嫌な王蛇がその背中を逃げる蜥蜴の尾を掴むように踏みつけた。満身創痍の生身の人間が仮面ライダーの力から逃れる術は無い。

「どうした…?…?もつと俺を楽しませろ!!」

「ちよつと、ストップ!!そこまでにしなさいよあんた!!死んじやったらどうんすんのよ!？」

続けて痛ぶろうとした王蛇だったが、慌てジャンヌオルタが叫んで止める。このまま続ければ黎斗は間違いなく死んで消滅してしまう…そうになったら、お仕置きどころの話では済まない。本気で自分の立場が悪くなってしまう。

「そこまでしたらもう良いから。あとはソイツからデータを取り上げれば良いだけだから退がりなさい。」

「…ああ?」

「私の言うことが聞けないっての?地獄からアンタらを引つ張りだしてやったのはワ・タ・シよ!!」

王蛇は一時手を止めた。すると、ベノサーベルを手離して再びベノバイザーにカードを装填する。

「お前…黙れ。」

【ADVENT】

『シャアアア…!!!』

「……なっ!?!」

同時にいつの間にかジャンヌオルタの目の前に現れた巨大な紫のコブラ。簡単に彼女など一呑みに出来そうな大蛇の名はベノスネーカー…王蛇の契約するミラーモンスターだ。まさか、キャスタークラスでもないのにいとも簡単にこんなサイズの怪物を術式や詠唱も無しに呼び出すとは予想すらしておらず、面食らったジャンヌオルタにベノスネーカーが吐く毒液が迫るッ!

咄嗟に『危ねえ!?!』とレーザーターボが庇うが代わりに強酸の猛毒が彼を遅い…ジユウウと音と共に苦悶の声をあげた。

「久しぶりのエサだ。喰っていいぞ?」

『グルルル…』

それだけではない。王蛇は更に人型サイズのサイのようなミラーモンスター、メタルグラスにエイ型の赤いミラーモンスター、エビルダイバーを呼びよせる。恐ろしいことにこの2体も王蛇の契約モンスターで主が暫く地獄にいたこともあり、とてつもなく餓えていた。今のジャンヌオルタたちは極上のご馳走にしか見えなだろう……

「さて……お楽しみはこれからだ……」

「…あ、ああアア……!!」

自分のペットはペットでお楽しみだ。ならこっちはこっちで楽しみもう…と、王蛇が更に踏みつけ……

「秘技ツ!!女神直伝・マジカル☆八極拳!!」

ドゴオ!!

「なにっ!?!」

…る直前に弾丸のように飛んでくる肘ツ!

不意討ちを喰らった王蛇は軽いダメージだったものの後退し当てられた腹を片手で押さえる。一体、何なのだ今のは?

その様子を遠くの崖からイシユタルが見ていた。

「ふくん、やっぱり筋がいいわ。教えた甲斐があつたわね。」

ニコニコと小悪魔敵に笑う女神様。さて、このまま自分は観戦といこう………冥界から悲鳴が聞こえるけど知らない。

「社長、回復です。」

さて、王蛇を後退させたGは黎斗に回復魔術を使用した。焼け石に水より少しマシなくらいだが、無いよりは良い……黎斗もなんとか立ち上がりデンジャラスゾンビガシャットのスイッチを押すが起動しない。

「……!?!、何故だ!!何故だア!?!」

「当たり前だ。エターナルの力を喰らったんだ…使えるわけがない。」

「……あ?…ああア!?!」

何度も押すが無機質にカチツカチツと音が鳴るのみ。加えてエターナルの宣告に完全に取り乱してしまう……

そこへ、王蛇が再び襲いかかろうとするがエターナルが制止する。

そして、Gへと呼び掛ける。

「カルデアのマスター……今のは見事だった。流石、世界を救っただけはある。そこで、お前に質問がある……」

「……?」

「その契約しているサーヴァントは俺達と同じ『ダークライダー』の

サーヴァントだ。人を越えた力を我が物顔で振るい、災厄をばらまき、悪徳を美とした仮面の悪魔……何故、ソイツや竜の魔女と契約している？お前は善人だろう？悪を許さず、大義を掲げそれらを挫いてきたお前の旅と相反する者だぞ？」

彼の問いは最もだった。Gの旅は人類の破滅を望む『悪』を駆逐する旅で、それは何処の特異点だろうと変わらないものである。結果、人理修復を完遂させ人理を救済したGは『善人』『正義』とされるであろう……

しかし、反面で彼は『悪』に定義されるサーヴァントと契約しているのだ。ジャンヌオルタは元々、邪竜百年戦争オルレアンにてワイパーンを操って多くの人々を殺している。そして、黎斗も自身の世界にバグスターウィルスを放ち……多くの惨劇の種をばらまいた。どちらも、多くの死をもたらし罪を犯した……許されざる者のはず。

すると、Gは黎斗を見据えて語りはじめる……

「確かに、突き詰めればあなたの言うとおりかもしれない……うん。だけど、まあ……なんていうか俺の我が儘というかさ。ぶっちゃけた話……そんな大義だとか俺には無い。助きたい……っっていう想いと勢いで気がついたらここまで来てただけ。」

彼の旅のはじまりは燃え盛る炎の中で自分に手を伸ばした儂い少女の手だった。そこから駆け出して、走り抜けて……泣いて、笑って、挑んで、挫けて、苦しんで、もがいて……その繰り返しで許せないエゴと向き合うことがあっても自分が正義だと理屈的に考えたことなど一度も無い。全力で都度の死線と試練を超えるので精一杯だったのである。

「ジャンヌオルタがやったことはこの目で見たし、社長のことも一応は教えてもらった。多分、犯したことは許されないとだと思っけど……今、契約して生きている今を大切にしたいんだ。悪いことは勿論、止めるし……サーヴァントでも生きているなら他にも生き方は選べるはずだって。」

でも、Gは知っている。恐れられた海賊たちが杯を仲良く酌み交わ

し、斬り裂き魔の名を冠す無垢な少女が幼い者同士で笑いあっていることを。悪だからといって可能性はひとつじゃない……生きるからこそ、見いだせる可能性があるよ。

「……それに俺、社長の作ったゲーム好きだし。カルデアのファン1号ですから!」

「!」

この一言が、黎斗を再び立たせるには充分だった。

使えなくなったバグヴァイザーを外し、代わりにゲーマドライバーを装着して新たなガシヤットを起動する。

「とんだお人好しだな……本当に呆れるくらいにお前は……」

【マイティアクション・エックスツ!!!】

使用するのはモノクロのゲーム。ゲンムの持つもう1つの切り札

……

「……ダークライダーア? 大いに結構!! 私の才能を縛る正義など邪魔でしかない!! この神の力は私のためと……私の才能を愛するプレイヤーのためにあるツ!!」

【ガシヤット!!】

「グレード0! 変身ツ!!」

【ガッチャーンツ!! レベルアップ! マイティジャンプ!! マイティキック!! マイティ・アクション……エックスツ!!!】

再び現れたゲンムの姿はデンジャラスゾンビの時とは違い、非常にシンプルでスラッとした姿だった。眼もオッドアイから赤に……スーツ部分には白いボディラインが走っている。『仮面ライダーゲンムレベル0』……死の力こそ無いが、扱いと強力は前者と退けをとらない。クラスはバーサーカーからアヴェンジャーへ……

「いくぞ、マスター……コンテニューしても、クリアしてみせる!」

この時の発した『マスター』の響きは今までと違っていた。形式的なものではないそれに気がついたマッシュだったが、既に戦闘はエターナルの斬りこみにより再会していた。ゲムムはかわしながら、青いガシヤットをGへと投げ渡す。

「受けとれ、神の恵みだア!!」

「!」

受け取ったそれは『パーフェクトパズル』とラベルされたガシヤット。取り敢えず、起動してみると…

【パーフェクトパズル!!】

「!」

目の前に展開されるコインを象った幾つものエナジーアイテム：これらが綺麗に空中に整頓されていた。

ああ、成る程そういうことね…彼は理解すると指先をクイクイツと動かしてエナジーアイテムを重ね、ゲムムへと投げる!

【高速化!!：マッスル化!!：鋼鉄化!!】

【ガツチャーンツ!!】

受けたゲムムはバフ効果が発動。バグヴァイザーをチェンソー形態で右腕に装着し、王蛇が降り下ろしたベノサーベルは片手で止め、キックによりふつとばされる。続けて、素早くエターナルの間合いに入り腹部を突く!

「…ぞい」

無論、この程度で倒れない。王蛇は立ち上がるが、そこにすかさずGがエナジーアイテムを操作する。

【混乱!!】

「しばらく、ピョッてるー!」
「?!?!」

王蛇に付与されたのは混乱のエナジーアイテム。文字通り、使用者に目眩など混乱にあたる症状を与えるデバフアイテムである。

これがパーフェクトパズルガシヤットの力…エナジーアイテムを

パズルに見立てて操ることが可能なのだ。これは操作者自身にも有効なのでかなり戦術の幅が広がるガシヤットだ。

「…クソが!!」

【U—NIGHT VENT】

しかし、パーフェクトパズルの力をもつてしても混乱は相手の動きを完全に封じるわけではないので、もがきながらも王蛇はカードを使用。すると、彼の契約モンスターたちが合体してドラゴンがごとき邪龍『ジエノサイダー』へと変貌。が、契約モンスターたちが予測しなかった動きのために大きな隙になり、ジャンヌオルタとレーザーターボは逃げ出す。

取り逃がした獲物を追いたいジエノサイダーだが、主からの命令は逆らえずに自らの胸を食い破りブラックホールを発生させる!

「…なにっ!？」

「…もらったアア!!」

【回復!!キユア!!】

【ガツチャーンッ!!キメワザッ!!デンジャラスクリティカルストライク!!】

流石のエターナルもあまりの事態とブラックホールの引力に動けず、そこにゲンムのライダーキックが一撃!!ビリヤードのように飛ばされ王蛇を巻き込みエターナルはブラックホールに吞まれていった。同時にジエノサイダーも断末魔をあげ消滅する。

「神が本気を出せば、まあこんなものだ。フンッ!!」

不遜に笑い勝利を確信するゲンム……だったか……

「ほう?中々面白いな……」

「!」

なんと、そこにはボロボロになりながらも立つエターナルの姿があった。が、彼は手を前に出し制止する、

「待て、もう戦う気は無い。そろそろ地獄の門限なんぞな…。それにしても、悪でも共にあるなら拒まない…。か…。悪くない。」

すると、彼は背を向け変身を解くと…。死神が描かれた黒に赤いラインが入ったジャケットを見せる。顔は影になってしまっているが不敵に笑っているようにも窺えた…。

「カルデアのマスター…。悪も悪魔も拒まないなら、そして…。地獄に気が向いたら俺を召喚すると良い…。俺は仮面ライダーエターナル…不死身の傭兵『大道克己』だ。覚えておけ。」

そして、彼は炎に包まれ消えた。

こうして、事態は一段落したのである…。

「ふうく…。…疲れたあ。」

「やれやれ、先に景品を渡してしまっただけはこの先に意味は無いな。カルデアに戻るぞ、G。」

☆☆☆☆

「どー、ちー、らー、にー、しー、よー、うー、かー、なー? あー、んー、ちー、んー、さー、まー、のー、いー、うー、とー、うー、り!!」

「…………ふむ、決めたぞ！ゲームムコーポレーションへ私の会社へ来い。
G!!」

「…」

…………はい？

「君の才能はやはり、優秀だ。数々の英雄を束ねる力は私の神の力と同じ価値がある。会社をより円滑にまわすには君のような人材が必要になるのは事実！何、問題はない…就職に必要な知識と技術はこの私が直々に叩き込んでやろう！」

いやいや、就職先が決まるヤツターなんて話ではない。

いくらなんでも話が突拍子が無さすぎるし、大体ゲームムコーポレーションはこの世界に無い……

「…………と言うのは察していたからな。既に聖杯を用意してある！心配は無い!!」

わーお、やっぱ神様って今も昔もどこもロクなのイネー！（呆れ）
神性なくてもハッキリわかんだね!!というか、先までの祭りのセツティングもこれ使ってたな。もう呆れるのも馬鹿馬鹿しくなるゲームマスターである。

「ああ、これはいつぞやの亜種特異点まがいなレイシフトした時に私

が回収したものだ。気にするな!」

「気にするわ!!」

「サーヴァントに聖杯の所有を許すとか、下手をしたら他のサーヴァントの暴走を招きかねない。本来なら血塗られた儀式『聖杯戦争』を勝ち抜いてやつと手に入る代物をただ拾ったというだけで所持するなど争いの種でしかない。」

「これで君を私の世界に呼び出せる…! さあ、神の下で働くためまずは…!!」

「そうはいきません!」

「! あああああああああああああああああ!!?!?」

こんな時の頼れる後輩。バグヴァイザーらしき青色のアイテムで黎斗をすいとり、中に吸収した。

「な、何故だア!?! 何故、貴様がそれを…!?!」

「あなたが制作中だったバグヴァイザーを拝借してこつそりダ・ヴィンチちゃんに組み上げてもらいました! これで、もう我が儘は出来ませんよ!!」

【なにいいい!!?! 貴様ア、神の作品によくも!!!】

「あとこの聖杯は没収です!」

ダ・ヴィンチちゃん製バグヴァイザー…本来の担い手とは別の者に造られたこれを『バグヴァイザーオルタ』としておこうか。この中で自らの才能と作品を汚された神は怒り狂っている。それから、暫く辺りに響きわたるやり取りが続き…遠くではダ・ヴィンチちゃんが自らの自室でクスクスと笑っていた。

「…やっぱり、彼も作家家へクリエイターか。芸術家だろうと作家だろうと、大事なのは自分の才能を愛してくれる誰かだからね。そして、その誰かを愛せる彼は幸せ者だよ。まあ、私も実はファンなんだけど。」

全く、愉快になったものだよカルデアも。結構、結構と笑っていたが……ふと、あるものに目が留まる。

「あれ？私、PCつけっぱなしにしてた？」

バグヴァイザーオルタ制作中に使ったあと電源を切ったはずのマイPC。うっかり忘れていたのか……

と、思っていたら管制室から呼び出しがあり、電源を一旦放置して向かう彼女。別に放置したところで部屋には勝手に誰も入れないし、スタンバイになる。

……そう安心していたが

「仮面ライダークロニクル」

直後、不気味なホログラムが浮かび上がったのに気がつかなかった

⋮

★仮面ライダーゲム 夏の新・壇黎斗祭り（大嘘）
〈F i n〉

Profile：新・壇黎斗Ⅱ仮面ライダーゲーム

★仮面ライダーゲーム

クラス：ライダー（レベル1〜3）

バーサーカー（デンジヤラスゾンビ）

アヴェジヤー（レベル0、X10）

属性：秩序・悪

魔力：ー

耐久：B+

筋力：B+

敏捷：C

騎乗：C+

幸運：B+

・宝具

1〜3&デンジヤラスゾンビ↓『デンジヤラスクリティカルデッド（Buster）』……敵単体に強ダメージ&強化解除&呪い付与&防御力ダウン&スキル封印

0&X10↓『ガンバライジング（Buster）』……敵全体に超強力な攻撃&確率で攻撃力ダウン&確率で防御力ダウン付与&悪特攻

Arts×2 Quick×2 Buster×2

戦闘スキル

1. 『カリスマEー』

2. 『星の開拓者 Eー』

3. 『ゲームクリエイター（真） EX』……自身のNPチャージ大

&味方全体のエグゼイド系ライダーの攻撃力アップ

出典：『仮面ライダーエグゼイド』

profile I……並行世界に存在するゲーム会社『ゲムムコーポレーション』の社長こそ彼。神の才能を持つと自称し、マイティアクションXをはじめとする大ヒット作を自ら造り上げ世におくりだした。

profile II……しかし、それは表の顔。世にバグスターウィルスを放った張本人であり、才能に溺れ他者を省みない傲慢な性格。故に、彼は報いを受けることになる。

profile III……そんな彼だが、自らが造った作品や自分の造ったゲームのプレイヤーには割りと優しい。ダ・ヴィンチちゃんいわく、悪逆を好む存在ではなく単純に価値観があまりにもぶつ飛び過ぎていたため一般的な倫理観に共感出来ないのだとか。（どこの世界も天才すぎる奴は最早『天災』である。）

profile IV……『ゲームクリエイターEX（真）』。ガシヤツトやゲーマドライバーを産み出したことに由来する。ガシヤツトの開発・扱いはまさにゲームにおいて神と言っても他言ではない力。（気に入った相手ならゲームを作ってくれるかも?）

profile V……クレイジーかつエキセントリックな彼だが、彼のことを少しでも理解出来ればそれなりに悪くない関係になれるはず。駄目ならバグヴァイザーに吸収してしまおう!! これで君も変神だ!! ※断じて変態ではない。

マイルームボイス

絆1……黎斗「ゲーム造りの邪魔だ。触るんじゃない。」

絆2……黎斗「対等だと思ふなよ? 私は神なのだからな!」

絆3……黎斗「私は……不滅だ……」

絆4……黎斗「私のゲームで遊ばないのか……?」

絆5……黎斗「ふむ、今までの冒険をきかせる。ゲームのアイディアになるかも知れん。」

好きなもの……黎斗「勿論、私はゲームを愛している!!創るのは私の使命であり生き甲斐だ。」

嫌いなもの……黎斗「不正なゲームは許さない!私の許可なくガシャットなど作るなどもつての他だ!!」

聖杯にかける願い……黎斗「聖杯か…特に持つことに超すことは無い。良いゲームの材料になりそうだ。」

イベント中……黎斗「神の力が必要なようだ。いくぞ、マスター!!」

宝条永夢について……黎斗「宝条永夢ウ!!認めたくはないが私と同等の才能を持っている……!だが、それが私のインスピレーションを刺激するツ!!クククツ……」

九条貴利矢について……黎斗「レーザーか…。別に私は謝るようなことは何もしていない。」

聖人たちについて……黎斗「あいつらは何なんだ!?神に向かって神を解くなんてふざけているにも程がある!」

ダ・ヴィンチちゃんについて……黎斗「天才ダ・ヴィンチか……だが、神である私のほうが上だ!!ハハハハハハハ!!」

ダークライダーについて……黎斗「私がダークライダー?そんな下らないことは気にしない……私は私がやりたいようにやるだけだ。」

千翼(仮面ライダーアマゾンネオ)について……黎斗「子供のくせになんて顔だ。アマゾンだかなんだか知らんが、ゲームのひとつくらい楽しめ。」

エミヤについて……黎斗「…エミヤ。お前の声どこかで……」

仮面ライダーブレイブ編

命の責任・生きる意味 I

カルデア 小ミーティングルーム

「さて、諸君……君たちに重要な報告がある。私は今、壇黎斗……そして、新・壇黎斗すら超越した存在になった。」

謎のスポットライトを浴びる黎斗。その前ではデスクに座る白眼を剥いたGとマシユ……あと、永夢にナイチンゲールにジャック……更にサンソンという奇妙な面々が集まっていた。

それにしても、これは何の御披露目なのか……

「……その名も!!」

「……その名も? (白眼)」

「……『壇黎斗神』ツ!!」

「はいはい、邪魔だから引っ込んでようね！」

コンテニューしてでもどうでも良い内容にスタンバイしてた貴利矢がバグヴァイザーオルタで自称・神を吸収・回収して退場させた。中で喚いているのが見えるがうるさいのでブチツと電源をOFF。ついでに部屋の明かりも元に戻した。

入れ替わりに白衣をなびかせてやってきたのは天才外科医と名高く、そして仮面ライダーのサーヴァントである鏡飛彩。今回、彼は普段は持たないマジックやら何やらを持っていきてる。

「少々邪魔が入ったが…予定通りはじめるぞ。」

「はい！宜しくお願いします、飛彩先生く!!」

彼の講義開始の挨拶に元気よく返すジャック。ナイチンゲールやサンソンも改めて向き直り、真剣な眼差しを向ける。

さて、これに至るには少々事情があった……



「…………ふむ、護身術を身につけたい……か……」

今から数時間前、アサシンのエミヤの元を訪れたGは唐突な願いを申し出していた。いつものように平然とした声のアサシンエミヤだが、内心は予想すらしていないことになり困っていた。

「僕以外にも適任はいると思うんだが……。正直な話、人に教えるような立場に立つたことは無くてね…マスターが望むようなことは出来ないと思う。それに、確か君はイシユタルに八極拳を教えてもらっていたはずでは？」

「いやあ……女神様の受講料は割高（ぼったくり）で……」

実際、イシユタルから八極拳の師事を受けているGであったがその

受講料であるQPは割高…もとい、ぼったくりである。女神に教えてもらってるんだからそれくらいの対価は安いものだど本人の談だが、実際は歩きまわってそこらの機械を次々と手当たり次第に破壊していくので修繕費のためにそれらを当てているのが真実。さらに、その中から自分の小遣いを1割〜3割をちよろまかしていることが発覚したため杖ギルからもうコイツに教えてもらうのやめるとストツプをかけられた。後、彼女は反省のためフリークエスト巡りに駆り出されている。全く、生産性があるだけ自称・神Ⅱ壇黎斗のほうがマシに思える…。

というわけできたのがアサシンエミヤというわけだ。

「純粋な体術に近い技を使って現代に近いサーヴァントってエミヤくらいしか思いつかなくて…」

Gの判断も単に暇そうにしていたからが理由ではない。そもそも、サーヴァントは自身の逸話が元になった戦闘技術や独自のスキルを持ってして自らの戦術を組み立てている。解りやすい例で言えば、セイバーのアルトリア…彼女はセイバーとしての剣の技術に加えて、魔力放出で自分の筋力を底上げし、更に直感スキルで素早く正確な騎士王に恥じぬ立ち回りをしてみせる。これを一流の魔術師ならそれなりに真似ることは出来るかもしれないが、残念ながらGはそんな魔力量も技術も持ち合わせていない。そのため、意外ではあるがGでもなんとか形だけでも会得が可能な八極拳をどういうわけか身につけているイシユタルが自ら手を挙げたわけだが…まあ、先の述べたような有り様である。あとはアーチャーのエミヤくらいだが、こちらは三食の準備に日々追われており手が離し辛い。

「お願い…このとおり…！」

「…」

ふむ。マスターの頼みを無下にするわけにはいかないだろう…それに、自分も今日は自室で重火器の手入れをするばかりの予定だったしたまには良いかもしれない。

「わかった…だが、その礼装では訓練にしても危険過ぎる。何か他の装備とかはないのか？」

「あ、それなら問題ないよ。」

☆☆☆☆

……そして、シユミレーター室

「変身!!」

【仮面ライダークロニクル!! Enter the game!! Riding the END!!】

Gが取り出したガシャットで変身したのはエグゼイド系ライダーの特徴的な装飾部を全部とつ払ってシンプルにしたような茶色い仮面ライダー、ライドプレイヤー。もとい、性能がお粗末この上ない量産型ライダーであるがそれでも耐久性などは下手な魔術礼装より高い。本来ならバグスターウイルスの感染による致死性のある代物だが、マシユからの対不浄の加護によりゲーム病の発症がない。よって純粋なパワードスーツのように運用が出来るのだ。

……無論、使用している仮面ライダークロニクルガシャットは自称・神からの提供である。

「うん、確かに大丈夫そうだな。」

アサシンエミヤもこれには安心した。流石に魔術礼装だけのマスターだったら軽い組み手でも殺してしまう危険性もあるため渋っていたが、これならば幾らかは安心して教練が出来るというもの。自分の宝具の弾丸を受けたらまずいかもしれないが、今はナイフだけなので大丈夫だろう。

「では、宜しくお願ひしますエミヤ先生!」

「先生はよしてくれ。」

ライドプレイヤーがライドウエポン短剣形態を構えたのを皮切りに、修練がはじまる。まず、ひたすらライドプレイヤーがアサシンエミヤに斬りかかるが、全てをナイフで軽くいなししていく。

「例え三騎士クラスでなくても、サーヴァントとの接近戦は避けるべ

きだな！」

「！」

やがて、隙が大きい腹部に叩きこまれる蹴り。決して筋力ステータスが高いアサシンエミヤではないが、サーヴァントの脚力となればライドプレイヤー程度なら簡単にくの字でぶっ飛んでいく。

だが、やられてばかりのライドプレイヤーではない。

「まだまだ！」

【パーフェクトパズル!!】

受け身をとりながら、隠し玉のパーフェクトパズルガシヤットを起動しエナジーアイテムを創作。選んだのは『高速化』『マッスル化』：これで、先とは倍のスピードで女神直伝の八極拳を叩き込みにかかるが……

「甘い！」

「うわっ!？」

これすらもあしらわれてしまう。全く、相手は1割も本気を出しておらず正面きつての戦いは不向きのはずの暗殺者のはずなのにここまで歯がたたないとは流石はサーヴァントというところか。

「アイテムでの効果は確かに悪くないが、まだ技術が追いついていない。踏み込みが甘すぎる。」

「なんの！」

地面にまたも投げ出されたライドプレイヤーだがまだ諦めない。またパーフェクトパズルガシヤットを握りしめ……

「……………ふう……」

ーギャンツ!!

…次の瞬間、2つのガシヤットとライドウエポンが宙を舞っていた。

それが、自分の目の前で切っ先を喉元に突きつけるアサシンエミヤの技だとライドプレイヤーが知るのはいずれから直後より僅かに間をおいた時間だった。

「……残念ながらここまでだ。」

見据える眼は…師でもなく、光を灯さない鋭く無慈悲な暗殺者の眼。あと少し前に出たら簡単に喉仏など裂くなど容易い位置にナイフが鈍く輝きを放ち、敵からあつという間にライドプレイヤーから戦意を奪う。

数秒後、ヘナヘナと尻餅をつき…変身解除されたGはため息をつく。

「やっぱり、こうなったか。」

「…」

少しアサシンエミヤは考える。自分は元より機械のような存在であり、多分…この思考と行動にこれから移るのもそれ故なんだろうと…

彼は熱の無い口でGに告げる。

「マスター、やはりこの鍛練は無意味だ。君はいくら足掻いたところでサーヴァントに勝てる人間にはなれない。」

……悪いとは思わない…確固たる現実で夢を折ることで無謀に繋がるのを防ぐ。無謀は勇気と履き違えられ死を招く…それはあつてはならないからだ。別にマスターである彼に不信があるわけではないのだが、サーヴァントである以上は無用な悲劇やリスクは避けるのは最低限の義務だろう。

「君の使ったアイテムは確かに運用として間違はいないだろう…だが、隙もそれなりにある。どちらかといえば後方支援向きだ。今まで

の戦い方に組み合わせたほうがよっぽど効率が良い。」

パーフェクトパズルのエナジーアイテムは開発者の改良により、仮面ライダーでもないサーヴァントでも効果を獲られるものになっている。なら、完全に後方支援に撤している今までの戦闘スタイルでも効果は十二分に発揮出来る。

「……うん、まあそうだよね。わかってる……」

わかってるんだけど……

割りきれない。その理由はアサシンエミヤにも察しがついた……

「クリム・スタインベルトか……」

「……うん。」

変身ツールというびつくりトンデモサーヴァント、ベルトさんこと『クリム・スタインベルト』。アサシンエミヤは風都でGたちと一緒に活躍したわけではないためよくは知らないが、Gを特異点風都にて仮面ライダーに変身させ……ソロモンの最終決戦でも力を貸したらしい。一時、直接契約を結んだらしいがやむを得ない事情で破棄せざら得なかったという話だ。基本、サーヴァントたちには差別なく接しているマスターだが彼には特別、マシユ並みに想い入れがあるようだった。「俺は仮面ライダーなんて器じゃなかったけど、ベルトさんは俺を信じてくれた。だから、今度契約する時は胸を張って仮面ライダードライブに変身できるようにになりたいんだ。だから、我が儘だけど俺はもっと強くなりたい。信じてくれたクリムに誇れる自分でありたい。」

「……」

……ふと、アサシンエミヤは擦り切れて微塵しか残っていない生前の記憶を浮かべていた。誰と何を話したかも、何を思ったのかも思い出せないが……月明かりに照らされて笑った顔があったような気がする。

そうだな……ここで突き放すのは簡単だ。でも、一度請け負った身として理屈をこねて投げ出すのは無責任だろう。

「…わかった。だが、やはり僕がこの役目は不向きだ。他のサーヴァントを捜してきてみるよ。少し、待っていてくれマスター。」

★☆☆☆☆

「ジャックちゃん…!!それ返してえ!!」

「駄目だよ。お医者さんがゲームで遊んでちや。」

「ナイチンゲール先生に報告なのだわ!」

「本当にやめてえ?!?!?あとそれ、僕の宝具!!」

騒がしいカルデアの廊下…。ジャックとナーサリーを追いかけ回すのは今日の医療スタッフの当番である永夢。彼もサーヴァントでこそあるが、現代の医師であるということでカルデアの医療班に組み込まれた彼。しかし、タイミング悪くやってきたガキンチョサーヴァントたちにマイティアクシヨンXのガシャットを盗られてしまったのである。変身ツールなのでサボりとかそんなわけではないのだが、あのバーサーク婦長に見つかったらどうなるか…考えただけでも恐ろしい。なんとか取り返そうとして追いかけてこして気がつけばシユミレーター室前……

ー ド ゴ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ドオンドオン!!!メキツ!!ドンツ!!!デ、デー……ン!!!

「「?」」

突然、とてつもない爆風やら衝撃やらでドアが吹き飛んだ。まさにいきなり戦争と嵐が一度に押し寄せたような事態に永夢はなんとかふんばるもジャックとナーサリーは軽すぎて転がっていき永夢を巻き込んで雪だるま状態に……

何事なのか……と思うや、ポイ捨てされるゴミのようにライドプレイヤーが投げ出されて変身を解いた。

【GAME OVER……】

「ぐへっ……」

勿論、中身はG。白眼を向いて身体のあちこちに生々しい傷とプスプスと焼け焦げた跡……仮面ライダークロニクルガシヤットは過剰なダメージに耐えきれずパリンツと大破。

そして、シユミレーター室から現れたのは……

「どうした、まだ肩慣らし程度でこの様とは情けない。」

影の国の女王、クー・フリーンの師と名高いカルデアの中で屈指の強さを持つサーヴアント『スカサハ』。おまけに水着である。

事は簡単、アサシンエミヤが代わりにと頼んだのが彼女。よりによって開放的（色んな意味で）な時にそんなこと依頼したものだからこの師匠ノリノリだったのだ。アサシンエミヤも英雄を育ててきた逸話を持つ彼女なら安心だと思った。……しかし、よく考えてほしい。その逸話をマスターが知らないわけがないし、それならわざわざ真っ直ぐ彼女の元に行かないで何故、アサシンエミヤの元に行ったのか。

（……我ながら考えが浅はか過ぎた。）

彼はそう後悔した。ちよつと立ち止まっておけば解ることだった……戦闘民族ケルトの最強が普通の鍛え方をするわけがあるか……うん、あるわけ無いよね。ましてや、（頭の）リミッターも緩くなりかけている彼女の手加減なんて期待するほうがおかしい。

このあと、アサシンエミヤは責任感から置き手紙をGのマイルーム

に残して素材集めツアーに旅立った。

「おかあさん!!」

「ぐえっ!?!」

…戻り、現在。もつれていた永夢を蹴っ飛ばしてGに駆け寄るジャック。怪我也出血も酷い…命に別状があるかは解らない彼女だが、とにかく『処置』をしなくてはと腰のポーチからメスを取り出す。「酷い怪我だね、おかあさん。大丈夫だよ、すぐにちりよーしてあげるからね。」

「へ?」

ジャック・ザ・リツパー……スキル『外科手術E』。

取り敢えず、メスでザクザクしとけばまあなんとかなる医療スキル。勿論、この少女は医者ではない…

……言うまでもないが、麻酔も無い。

「いつくよ?」

「まつ!?!ジャック、たんm……!」

ザクザクザクザクブシユブシユブシユブシユ!!!!

「ぎゃあああああああ?」
「あああああああああ!!!!!!」

Gの受難はつづく……

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

命の責任・生きる意味 Ⅱ

さて……あれからGはリアルデンジャラスゾンビに成り果て、自称・神はわざわざ造ったガシヤットを破壊され『私のガシヤットがあ!?!』と悲鳴をあげていた。こちらはともかく、マスターのまさにジャックの2号のような有り様な身体中の縫い目は見るに絶えず痛々しい。手術というよりはデディベアの下手な裁縫後と例えてもいいそれに無論、『鋼鉄の婦長』は黙っていない。

「どきなさい！彼女には処置をする必要があります!!」

「落ち着いてください、ナイチンゲールさん!! 相手はまだ子供ですよ！」

「子供だからといって許されることと、許されないことがあります!! またこのような事例が起きてからでは遅い!!!」

バーサーカー……ナイチンゲール。純粋な医療技術を持つサーヴァントであるが、いかんせんバーサーカーであるため理性的な思考などがふっ飛んでいる彼女。その恐ろしさといえは、人間のカルデア職員から下手なサーヴァントまで彼女の『治療』となれば震えあがり……アルトリアシリーズもオルタであっても彼女には頭が上がらない。今もマシユが必死に押さえているが、ズルズルと前進していく……

そんな彼女の怒りは今や、永夢の後ろでナーサリーと共に怯えているジャックに向けられていた。普段の彼女たちならそんなじゃそこらのエネミーだって笑いながら遊び道具にする始末だが、このバーサー看護師となれば話は別。げんこつでは済むまい……悪い子の指はいらないと切断されるか最悪の場合は思考する脳が悪性と取り出されても不思議ではないのである。

「ここで、なんとか永夢も食い止めようとするが……」

「ナイチンゲールさん、別に悪気があったわけじゃないし……」

「邪魔ですー!」

「うおおおおお!?!」

生身など片手でぽーいと放り投げられておしまい。マシユも振り払われ、とうとうジャックの目の前に立つナイチンゲール、最早これ

までとジャックは目を瞑り：

「待て。」

…しかし、寸前にナイチンゲールの肩を掴んだのは飛彩だった。止められた彼女はギロリと彼を睨む。

「離してください、鏡先生。彼女には適切な処置が必要です。」

「必要なのは処置じゃなくて『指導』だろう。この娘は患者ではない。そして、お前にも指導が必要だ。」

「…私にですか?」

首を傾げる彼女。端からみれば問題だらけだが、自身は全く気がついていない上に人の話を聴かない。これも彼女の恐ろしさであるが、あえて飛彩は会話という手段で『間違っている』と突きつける。

「ああ、そうだ。しっかりと怪我人に対しての処置について教えていなかった俺たちにも落ち度がある。なら、何を間違え何が正しいのか示すのが俺たち大人の役割だろう。」

「…」

黙るナイチンゲール。別に話を基本聴かないからといって理屈が通じないサーヴァントではないのだ。怪我とか病気というワードでバーサクするだけであって…

すると、今度はジャックへと目を向ける飛彩。

「これから手術（オペ）をする。ついてこい。」

そう促すやいつの間にか用意した担架にGを乗せてカルデアの手術室に向かう…

ジャックとナイチンゲールも共にこのあとを追っていった……



「……長い回想でした。」

時と場所は小ミーティングルームに戻り、溜息をつくマシユ。あれから、飛彩の外科手術（A＋＋）と治療系の魔術を扱えるサーヴァントたちによりGはほぼ何事も無かったように回復した。尚、事を起こした発端のスカサハは全く反省はしておらず、代わりに弟子が謝罪することに…

そして、これからは基本的な怪我などへの対応をサーヴァントたちにも身につけさせるべきということ。飛彩主催の講習会が行われることになった。なったのだが…：：：集結したのは医者 of サーヴァントたちが大半で気がつけばかなり踏み込んだ医学の話となり、あつという間に素人のGやマシユがついていけなくなってしまう始末。なんとか永夢もサポートを入れようとするが、彼自身も油断すると話についていけなくなりそうだ。

「……いー」

そんな中でも、必死にノートをとったり辞書のように分厚い参考書を見比べながら対応しているのはジャック。眼にも留まらぬ速さでページを左右にめくり、ペンを走らせ、なおかつ飛彩の話の聴き逃さない。隣のナーサリーは飽きて『お茶会…』とぼやいており、軽い気持ちで参加したジャンヌ（スパム略）リリイに至っては目をまわして知恵熱でオーバーヒートする始末なのにこれは凄い。幼い少女の外見であっても悪名高きジャック・ザ・リッパー…その知恵と頭のキレに関しては逸話通りなのかもしれない。

「ジャック、ついてこれているか？」

「うん！もつと続けて!!」

「…!？」

飛彩の問いに笑顔で答える彼女。それに、サンソンすらギョツとした顔をし…ナイチンゲールは感心した表情をする。尚、ジャンヌ（スパム略）リリイはどうとう限界がきてボンツと気絶してしまった…

それから、暫くして講義は終わる。取り敢えず、ナーサリーとジャンヌ（スパム略）リリイは貴利矢が連れていき…残るは医療スキル持

ちのサーヴァントとGとマシユになっていた。

「すまない、つい熱が入ってしまった：お前たちには解らなかつただろう。」

飛彩も自らがマシユたちには踏み込みすぎた内容だと理解していたが、勢いのままにやってしまった。本来なら医療サーヴァント向けの講習会の予定でカリキュラムを組んでいたのに予定外の参加者や（自称・神の乱入など）想定していなかった。何よりも：（予想より遥かに呑み込みが良いな：）

ジャツクの学習能力の高さである。とつていたノートや付箋紙がはられた辞書などを確認してみたところ、字の汚さ等は歪めないものの短時間で要点をまとめ他人が見ても解りやすく纏められている。Gの手術の時に熱心に見ていた様子からもしやと思つていたが：これは中々の素地があるかもしれない。

これにはマスターであるGもたじたじだ：

「うう：俺、おかあさんなのにさっぱりわからなかった。」

あれだ：子供に知識で置いていかれる親の気分。そもそも、サーヴァントに蘇生とか必要な事態なんてまず無いだろうに。

そんな彼にジャツクは笑う。

「大丈夫だよ、おかあさん。私たち、もっと勉強しておかあさんの怪我也も病気も治してあげるからね。」

「：ジャツク」

駄目だ、ぶわあ：と目許に汗が：

気がついたら全力で抱き締めていた。『苦しいよあおかあさん：』なんて言う姿まで愛らしい：もう手術のこととかどうでも良い、暫く愛娘が出来た気分浸っていたい：

「：Gくん、こちらダ・ヴィンチちゃんだ。お取り込み中のところ悪いけど、お仕事の時間だよ。」

…ちつ、空気の読めないやつめ。

★☆☆☆☆

第四特異点ロンドン…

現在、人理修復中のこの場所はかつて今、召喚された彼女とは違うジャックと出逢い…また、はじめて姿を現した黒幕たる魔術王ソロモンに大敗を期してしまった因縁の場所でもある。産業革命時代ということもあり、他の特異点に比べればだいぶ現代に近いが明らかに『おかしい』ことが起きている。

「これって…」

レイシフトした目の前には霧の壁。Gは似たような事象を知っている…。ついてきたジャックに目を向けると『うん…』と頷いていた。「間違いないね、『わたしたち』がまた沢山でてきてるよ。」

「…やっぱり。だから、ナイチンゲールを置いてきたんだね。」

以前、ジャックとロンドンにレイシフトした際も彼女と同じ霊基のシャドウサーヴァントが大量に出現し、魔霧を発生させていた。シャドウサーヴァントといえど、宝具を抜かせばある程度はオリジナルに近い能力を扱えるためそこのエネミーとは比較にならないほど危険である。ましてや、ジャックの霧は『標的が女性（雌）』『夜であること』など条件が揃えば問答無用で先手をとれるという恐ろしい力。故に、事前に事態を察知したジャックがナイチンゲールの同行を止めた…で、その代わりにきたのが…

「…直流!! 直流!!」

「交流!! 交流!!」

「もうやめてよふたりとも!!」

大統王ことエジソンによりによって彼と犬猿の仲のニコラ・テスラ……あとこれを止めようとしていたタケルである。運悪く、歯止め役のエレナがいないために代わりにとタケルが奮闘していたところをナイチンゲールの代打として同行。しかし、この始末。

唯一の救いはまともなサーヴァントとして飛彩と永夢がついてきてくれたこと……必然的に野郎ばかりになってしまったが……

「成る程、この霧が今回の異常か……」

「ここいら一帯のシャドウサーヴァントを全て倒せば解決するはずです。」

飛彩に説明し、事態を深く把握するためにカルデアへと通信をつなぐG……だったが……

【ダ・ヴィンチだと思っただか? 私だア……!】

「!?」

ホログラムが映したのは本来いるべき主の姿ではなく、まとも自称・神こと壇黎斗神。予想外の登場にGだけではなく飛彩すらも目を見開き……永夢にいたっては微妙な視線を向けている。(なお、ジャックのみはプレゼントをくれる人と喜んでいる)

「黎斗さん、何をしてるんです?」

【壇黎斗神だ、宝条永夢ウ!! 私は今、彼女に代わってナビをすることになった。因みにダ・ヴィンチはこの特異点の起点になる場所を捜している。神のナビだ、ありがたく思え!!】

「……」

頭をかかえる飛彩と永夢。このお調子者をどうにかできないのだろうか……というか、他にもいただろ候補。

その時、ジャックがサツと身構える!!

「来るよ!!」

合図と共に魔霧が一行を包み込み、あちこちの合間から黒い影が覗く………。囲まれた。いつ靄の中から飛び出して襲ってきてもおかしくないだろう。飛彩、永夢、タケルはそれぞれ変身アイテムを構え…エジソンとテスラも臨戦態勢へと入る。

「…これより、手術（オペ）を開始する！術式Lv. 2!!」

【タドルクエスト!!】

「…大変身!!」

【マイティアアクションX!!】

「…変身!!」

【カイガン!!オレ!!】

そして、君臨する3人の仮面ライダー…ブレイブ、エグゼイド、ゴースト……

同時に、シャドウサーヴァントたちが一斉に襲いかかり、戦いの火蓋が切られた。

その様子を物陰から窺う甲冑姿の女性に気がつかずに…

To be continued.

仮面ライダービルド（桐生戦兔）編

仮面ライダービルド編 Build on Bu

ild

人類継続保障機関フィニス・カルデア……グランドオーダー発動直前当初に比べれば人も物質も大幅に減ってしまったが、それでもいくつかの部署は未だに機能している。それもまあ、マスターの契約したサーヴァントの助けがあつてこそ……

しかし、元から一癖どころじゃ済まない連中が固まつて……おまけに『科学』とか変態とか集まるのが恒例の場所なら一体、どうなるか？

………あんまり考えたくない。

幕間の物語 仮面ライダービルド編

— Build on Build —

「何をしているんですか!？」

その時、異変を察知して部屋に突入してきたマシユ。これに『あ、やべ!』と赤青の仮面ライダーは脱兎のごとき勢いでマイルームから逃走。しかし、その前に突如としてコンティニュー土管が現れて飛び出した仮面ライダーゲンムが立ちはだかる！

「神の力をが必要なようだなアアア……」

【ゴリラモンドッ!!】

——ドゴツ!! (神が粉碎される音)

【GAME OVER……】

「この役立たず!」

マシユの辛辣な一言はさておき、赤青の仮面ライダーはあつという間にレイシフトルームへと逃走し時空の穴へと飛び込んだ。その後、すぐに時空の穴は消失してマシユは追跡を断念せざる得なかった。

「くっ……またですか!」



「はい、俺は無実です。」

「まだシラをきるか!!」

ダ・ヴィンチちゃんの部屋……そこに常駐している天才物理学者(自称)・桐生戦兎はG、マシユ、クロから取り調べを受けていた。ご丁寧に刑事ドラマあるあるの取り調べ室セットまで完備している。今回、特にクロに関しては怒り心頭といった勢いで戦兎に詰め寄って

いた。

「あんたのせいで、最初は私に疑いがかけられたんだから!!いい加減ら私の潔白を証明するためにもさつきと吐きなさい!この際、免罪でも構わないわ。」

「いやいや、駄目でしょ。それでも俺はやつてない。」

実は、沖田たちのような被害が出たのは今回がはじめてではない。当初、数名のサーヴァントたちが衰弱しているのが度々発見された……その全てがマタ・ハリやアルトリアシリーズたちや、清姫といった女性サーヴァントばかりだった。この件、何者かの襲撃者がいるのは明らかだったがその姿は掴めずにいた。だが……

——それって、もしかしてクロじゃない? byイリヤ

……との発言により、真つ先の容疑者になったのはクロ。魔力供給という如何わしい行為(イリヤ談)は文字通り供給元の魔力を吸い上げ、結果的に相手を弱らせてしまうこともあるのはGとマシユも把握している。そして、彼女は数名の少女サーヴァントを毒牙にかけた前科がある……となれば、容疑者になるのも必然だった。

「しかし、戦兔さん……証拠の写真の仮面ライダーは間違いなくビルドです。それに、被害にあつたサーヴァントたちの中にも変身するあなたを見たと言言している方もいます。」

……が、ギルティ判定を受ける直前で上がったのが彼、桐生戦兔の目撃証言である。その後、仮面ライダーや男性サーヴァントなど無差別な通り魔的犯行が相次ぎ、基本的に女性(主に少女)しか相手にしないクロの白さは証明され逆に戦兔は真つ黒な立ち位置に堕ちてしまったのである。おまけに、仮面ライダービルドの写真が監視カメラにおさめられており動かぬ証拠となっていた。

それでも、このままではいられないと反論する戦兔。

「待った待った!俺はさつきからここにいたし、そのビルド(仮)はレイシフトして逃げたんだろ?なら、そっちのレイシフト先を追うのが賢明じゃないか?」

「それが、レイシフトの記録そのものが消えているんです。どうやら、追われることを想定して特殊なウイルスを仕込まれていたよう……。」

「なにそれ……。」

「加えて、短い時間ですが観測された霊基パターンは戦兎さんとほぼ同じ。かなり証拠が揃っています……白状するなら今のうちかと……。」

「だーかーらー！俺はずっとここにいたの!!それは、ダ・ヴィンチちゃんだって証明してくれるって!」

揃った証拠……だったが、不意にふられたダ・ヴィンチちゃんは頭に『?』を浮かべこちらを見ている。あ、これ駄目なパターンですね。

「嘘でしょ、ダ・ヴィンチちゃん!？」

「話は署できこうか?」

「待って、マスター!本当に俺は無実!!ああ、もう免罪は俺のキャラじゃなくて、万丈の役でしょうが!」

「待った、待った!Gくんにマシユ、少しふざけたのが悪かったね。彼はここにいたよ、その事件の時もね。」

なんだ、白か。つまんねー……と、ふんぞり返るクロ。アリバイが成立しちゃう仕方がない……なら、一体あのビルドは何者なのだろう?話は振り出しだ、一行はうーんと考えこむ。ビルドの能力は本物らしい、となると……

「……ビルドオルタ?……ビルドリリイ?……それとも、佐藤太郎?」
「最後の何でしっつんのマスター?」

考えられる可能性を順列していく。同じ宝具を有しているなら、宝具となる原典を共有していたものか、或いは『別側面』などの可能性

がある。まあ、色々と考えたところで所詮は妄想なのだが……取り敢えずと何処からともなくホワイトボードを引っ張ってきて要点をまとめ始めた。

「ええ、ここにビルド（仮）について情報をまとめましょう。」

★ビルド（仮）の特徴

- ・ 出現は神出鬼没、外見はビルドと完全に一致
- ・ 遭遇したサーヴァントは『成分?』を抜き取られる
- ・ 変身する直前の素顔や声は桐生戦兔と同じと証言
- ・ ビルドドライバーやフルボトルといった宝具は本物と思われる
- ・ ビルドになれるのは桐生戦兔のみだが、ビルドドライバーを使いこなしている

「……やはり、戦兔さんの別側面……或いはカルデアのシステム外で召喚されたサーヴァントなのではないでしょうか？変装の類いならアサシンといった方々が気がつかないのも変ですし。」

確かにこのカルデアには半端な変装など簡単に見破れるサーヴァントは多い上に、その道で歴史に名を残してきた者たちもいる。これだけ、被害を出しておいてみすみす見逃しているのもおかしい話。それに、カルデア以外の同じ霊基のサーヴァントが騒ぎを起こした前例もある……

「ま、何にせよそろそろ対処しないといけないわけだ。ちよつと、俺につきあってくれるかいマスター？」

頭をかいて、やれやれと戦兔は事態收拾のため重い腰をあげる。自分の無実を証明しなくては『研究』に没頭するのは無理だと嫌でもわ

かっていたのだから。

★★
★★
★★
★★
★★

………さて、前々から気になってけど……そろそろ頃合いだな

俺（アイツ）は一体、何を企んでるんだ？

T o b e c o n t i n u e d .

Build on build II

……偽ビルド襲撃から数日。

「私オルタあー！たつくんから離れなさい！！たつくんの麻婆豆腐をフリーするのは私です！」

「何を言っている？それは私の役だ。オリジナルは血でも入ったらずいから引っ込んでいると良いぞ。さあ、たつくんフリーしてやるぞ……」

「いいや、お前らふたりとも離れろ。」

カルデアの食堂。W沖田に取り合いにされるたつくんの姿が……。最近が増えた沖田オルタにまでなつかれた上にだいぶ良い歳の姿で現界（仮面ライダー4号あたり）しちゃったたつくんの故に若干、危ない絵面に見えるのは気のせいだろうか……

「……いったい、沖田どもはたつくんの何がええのじゃ？え……？」

「茶々知ってるー！中の人ネタってやつ！！ネタにする人少ないけど！」

「やめんか、そういうの言うの。まー、わしもニチアサならプ●キュアとかあるんだよねえ……キュ●ノツブとかもう本当、当時のトレンドで猿もびっくり……」

「叔母上、その頃まだ喉く●ゆうじやなくね？」

「右●さんのプ●キュアはパワーワード過ぎる……まあ、そんなことはどうでも良いから君たちの成分を採取させてくれ。」

「わかったから、そう急がずとも……ん？茶々、主今、なんと言った？」
「……今の茶々じゃない……よ……？」

え……？じゃあ、今の声……どつかで聞き覚えが……

何か悪寒走る。

ゆっくりと……振り向くと……

【イエーイ!! (ゴリラモンド)】

「うわあああああまた出たあああああああ!!?!?」

偽ビルド再び。すかさずW沖田が斬りかかるがダイヤモンドの豪腕を刀が貫けず、ゴリラの腕力で一網打尽。巧も変身しようとしたがダイヤモンドの飛沫をとばされてファイズギアを取り上げられてしまう。

「さて、君たちのぐだぐだ粒子……？ だっけ？中々、興味深いからまた採取させてもらおうよ！」

「待て！俺にぐだぐだ要素は無……ッ!?!」

「ハ●パーバトルビデオ。」

「……」

たつくんの『それは……ノーカンだろ……』という悲痛な訴え虚しく全員、成分を吸収されてしまった。全員、色素が抜けて動けなくなつて

しまう。

さて、これだけ煽ればそろそろ……

「……で、これで気は済んだか？」

やっぱり、来たか。本物の仮面ライダービルドⅡ桐生戦兎…彼は偽ビルドを見据え、ビルドドライバーを装着していた。周囲にもG率いるサーヴァントたちやマシユの姿もある…逃げ場は無い。しかし、偽ビルドは余裕そうな姿勢を崩さない。

「久しぶりだね、桐生戦兎……」

「ああ、そうだな…葛城巧？」

挨拶のかわす様から両者は顔見知りだと理解できる。そして、偽ビルドはビルドドライバーからボトルを引き抜くとそこから現れたのは白衣を纏いガスマスクをお面のように被る桐生戦兎と同じ顔……

途端、周囲にどよめきが起こりGは戦兎に彼について一体何者なのかと問う。そして、答えはマスターである彼にとって予想外であった。

「アイツは悪魔の科学者<キャスター>の側面で現界した仮面ライダービルド…『葛城巧』。……」

……俺の『大元<オリジナル>』だ。」

☆☆ ☆☆ ☆☆ ☆☆

……説明が遅れたが、桐生戦兎の霊基はかなり特異なエクストラクラスの『アルターエゴ』である。

該当する霊基は『沖田総司オルタ』、『パッションリップ』、『メルトリリス』：最近では『メカエリチャン』なる者や、仮面ライダーで言うなら『エグゼイド』、『パラドクス』、『リュウガ』などかなり存在が特殊なものがあたる。このクラスの特徴としては（ごく一部を除いて）大元にあたる存在がいるのだ……わかりやすい例こそ沖田オルタあたる沖田総司、リュウガに対しての龍騎などなど。

無論、アルターエゴクラスの桐生戦兎もまた例外ではなく大元の存在がいるわけであり……

「……それが僕、悪魔の科学者<キャスト>『葛城巧』ってわけだ。」

シユミレータールームへと移動したGと戦兎に揚々と説明してくれた葛城。まあ、彼の提案なのだが……要は何にしる戦闘は避けられないということだろう。取り敢えず、戦うなら食堂でドンパチやられるよりは良い。

さてさて、問題はこの悪魔の科学者が一体なにを思ってカルデアに乗り込んできたのか……だが……。それを問うのは警戒全開の戦兎。

「葛城、お前の狙いはなんだ？」

まどろっこしいのは無し。単刀直入に。

すると、彼は白衣から通常のものより遥かに大きいフルボトル……通常の飲料水の缶より少しばかり小ぶりっていて透きとおるような色合いのものを取り出す。それはビルドの『最終再臨<ビルドアップ>』に必要な最後のフルボトルであり、自分<桐生戦兎>が創りあげたものではなく自分<葛城巧>が創りあげたものの故か現界の際に持ち得なかったビルドの最強の力……

「……ジーニアスフルボトル……!!」

「そう。ビルドの最後のパーツであり、君の忘れ物さ。」

……オペレーターにまわっていたマッシュやダ・ヴィンチちゃんも息を呑む。仮面ライダーは最強形態に至るために特殊なアイテムを使用するのは知っており、その全てが通常の形態より破格の力を発揮する。勿論、ビルドのジーニアスについても既に聞いていたわけだが……
【成る程、君は彼にそれを届けにきた。でも、それだけじゃいけないだろう?】

「ああ、勿論そうさ。僕には僕の目的がある。」

マイク越しのダ・ヴィンチちゃんの質問を肯定する葛城……まあ、でなくてはわざわざサーヴァントを通り魔なんてしないだろう。さあさあ、ここからが本題……

「桐生戦兎……。ジーニアス無いからって、怠惰を貪っていたわけではないだろう? 研究していたはずだろ……『更なる力』を。」
「……っ!」

「そして、それを察してきて君はその力をここに持ってきているはずだ。さあ、見せてくれ。」

更なる力……恐らくは新たなフルボトルか、それともドライバーか何かか……葛城の狙いはそれ。戦兎の身構えるリアクションからして相当する存在があるのは確かだった。

しかし、ここはカルデア……サーヴァントたちが集うこの場所で不埒を働きただで済むだろうか?

「フハハハハ……! 我が友を貶めようとして自らの主張を押し通そうとは片腹痛い!!」

「凡骨とは今回ばかりは気が合うな! 左様、ここをカルデアと知つての狼藉か!」

高らかな笑い声をあげながら来る獅子頭にドレッド頭……戦兎と同じ科学者仲間のサーヴァント……『エジソン! ニコラ!』と声をあげるG。そう、この世を文明の光で照らした二大偉人である。カルデアきつての変人枠（科学的方向でのみ）であり、そんな気質故か戦兎とも交流があり彼も科学者として尊敬する英雄である。また、彼等からしても戦兎は研究する対象こそ違えど人類の未来のために科学の道

を志す後輩であり、その顔に濡れ衣をかけるような所業は許すわけがない。

対し、葛城は余裕を崩さずペコリと彼等に礼をする。

「これはこれは、ニコラ・テスラに発明王エジソン…。お会い出来て拝謁の極み。いや、『憐れな発明強盗被害者』に『訴訟王』と言ったほうが良いかな？」

口は的確に逆鱗を撫で上げたが。『ほう…?』と科学者ふたりはコメカミをひくつかせ、手元にプラズマを走らせる…。あ、まずいこれ激おこだ。これ絶対に灰にするまで止まらないやつだ。

「凡骨…言わずともわかると思うが……………」

「気が合うな、スットコドツコイ…」

「二凶に乗るなよ、若造が!!」

待て!!と声をあげる戦兔の声も虚しく放たれる文字通りの雷の柱。かつて、雷神の権能と言われたそれを人の手元にまで落とし込み自らの宝具へと昇華したそれは容易く葛城を……

【エボルドライバー!!】

「!?!」

貫くことなど無く、突如として彼の取り出した現れた『紅いビルドドライバー』に弾かれて四散する。サーヴァントの雷撃、如何に近代の英雄なれど威力は半端ではないはず。ならば、逸話の具現すら簡単

に振じ伏せるアレは何なのか……：一堂が啞然とする中で、戦兎のみが正体を知り更なる驚愕をしていた。

かつての怨敵が血眼になってさがしていた切り札であり、ビルドドライバーのオリジナル……：しかし、それは主と共に世界新生時に失われたはずの……

「エボルドライバー……だと!？」

「ああ、そうだ。模造品ではなく、オリジナルのね。」

エボルドライバー……。しかも、オリジナルだという。しかし、本来ならば彼の所持していたものではなく地球外生命体の技術の産物だ。ましてや、オリジナルなんぞいくらハザードレベルが高かろうが主以外に扱える代物じゃない。そのはずなのだが……

「葛城……何故それを持っている!？」

「紆余曲折あってね、説明は面倒だ。まずは僕の研究成果を見てもらおうか?」

睨む戦兎を笑いながら見据えるとエボルドライバーを装着する葛城。取り出すのは『青いフルボトル』と『黒のフルボトル』……それをスロットへと接続していく。

「タンク!! ライダーシステム!! エボリューション!!!」

【Are you Ready?】

同時に歓喜の歌にも似たメロディが流れ出し、エボルドライバーのレバーをまわす。前後に形成される青のパーツが人型を象り、邪悪な魔力を洩らす……

管制室にいたマシユも悲鳴にも似たオペレーターを叫ぶ。

【魔力反応急上昇! 霊基変質を確認……これは!?!】

「葛城……!!」

………そして、悪意の科学者は戦兔に向かい鋭く口角を上げて言
い放つ

「変身。」

「タンク!! タンク!! エボルタンク!!! フーツ、ハツ!
ハツ!! ハアツ!!」

To be continued.